
人を形作る大切なかけら

真田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人を形作る大切なかけら

【Nコード】

N 6 6 4 9 P

【作者名】

真田

【あらすじ】

「お前は欠陥品だな。人が皆持っている大切なものが壊れてる。」

人を殺し続け、人の心を失なった少女がいた。

彼女は演じた。人のまねごとをした。そうやって生きてきた。

これは理不尽な運命に抗い、人の感情を取り戻していく話。

プロローグ

いつまで人のまねごとをすればいいのか。
たぶん、永遠にだろう。

怒るってなんだ？
うれしいってなんだ？
楽しいってなんだ？
つらいつてなんだ？
怖いってなんだ？

昔は覚えてた気がする。でも今はわからない。
あの日から。あの時から。私の中のなにかが壊れたあの日から。

だから、私はまねごとをする。

そうしないと不自然だから。

だから私はふりをする。

怒るふり。
うれしいふり。
楽しいふり。
つらいふり。
怖いふり。

それは、いいことなのか、悪いことなのかは
わからない。

第一話 適合試験だよ。(前書き)

ネタバレ注意。基本ストーリー中心です。初めてですが感想を聞かせてくれるとありがたいです。

第一話 適合試験だよ。

ここが適合試験会場らしい。なんで試験会場なのに銃撃の後とか剣で切り付けた跡があるんだろう？

「ようこそ人類最後の砦、フェンリルへ。」

頭上のスピーカーから感情のこもってない声が響く。もっとテンション高くっ！

「少しリラックスしたまえ。そのほうがいい結果が出やすい。」

読まれた！？と思ったがただ単にこういうのをたくさん見てきただけだろう。

稀ではあるが失敗してアラガミ化。なんてこともあるらしい。どうせなるなら強いやつ希望。ウロボロスとか、サリエルは絶対いや。と考えると緊張をほぐそうとして失敗。嫌なことを思いだし慌ててその思考から抜ける。

「これより、「新型」の適合試験を始める。心の準備ができたら真ん中にあるケースの前に立ってくれたまえ。」

準備…そんなの決まってる。そんなのとづくにできてる。

そう考えるとあら不思議。緊張が嘘のようにほぐれる。パンパカパーン。心を落ち着かせるを覚えた。

準備完了。ということでは真ん中のケースの前に立つ。真ん中じやなくて入って目の前のほうがいいと思うのは私だけ？

そこには剣…いや銃？なんかほかにも盾がミックスされた武器らしきものが。これが神器。いつもアラガミを撃退してる人たちは、剣か銃かのどちらかだったんだけど。だから新型なのかな？

神器というのは唯一アラガミに対抗できる生体兵器。アラガミというのは突如現れた何でも食べる困ったさん。人間も食うので人口は今日も元気に減少中。

「では次にその「神器」をつかんでくれ。」

スピーカーから指示が飛ぶ。

ふうつと一息。意を決して神器の柄の部分をつかむ。

するといきなり腕をプレスされる。つぶれてはないよ？

それと同時にいきなりの痛み。まるで何か異物が侵入して来るような痛み。人間が入れてはいけないものが入ってくる感覚。

「っ！……。」

声に出そうとするのを必死にこらえる。もしかしてこれがアラガミ化というやつなのだろうか。どうせなるならサリエル以外の何かに……とまで考えたところで突如痛みが引く。

それと同時にプレス機からも解放される。神器を持ち上げてみると意外と軽い。腕には赤い腕輪が。赤！？通常の三倍なのかな。だったらいいな。

「合格おめでとう。君がこの支部初の「新型」ゴットイーターだ。」

合格らしい。もっと喜ぶべき？ワイイ、ウレシイナ。

「この後はメディカルチェックが予定されている。指示があるまでその向こう部屋で待機してるように。」

また待つのか？こちらとらどんだけ待ってたと思ってんだこん畜生。

「気分が悪いなどの症状がある場合はすぐに申し出るよう。」

あーはいはい。わかったから。

「期待しているよ。」

本当にそう思ってるの？と思いつつもこの部屋を後にした。

第二話 鬼教官のお話だよ（前書き）

前回サリエルの表記を間違っていたみたいです。すいません。

第二話 鬼教官のお話だよ

試験会場から出ると何か白いのがぴょんと肩に乗ってくる。

「あ、サク待ってたの？」

サクとは友達である猫のこと。飼い猫ではないよ？餌あげたことないし。うちに住んでるわけでもない。外に出かけるといつの間にかついてくる。どうやってここに入ってきたのかは気になるけど。入り口には軍服着たマツチヨなおっさんがいたはずなんだけど。まあ猫だしね…

暇な奴だねえと話しかけるがこの猫が返事をするわけもない。とりあえず待つてるとのことなのでソファで待機。そこにはなんか黄色いのがいた。人っぽくはあるけど。特徴は黄色い。アホっぽい。アホっぽい。ほかに特徴がないので二回言ってみた。あ、あと赤い腕輪。自分だけ赤じゃないらしい。シヨックだ…

「ガム食べる？」

「嫌いだからいいや。」

そう答える。正直腕輪のことがあったので話す気分じゃなかったけど無視などはとても失礼なので適当に返す。私はとっても礼儀正しい子。あとやっぱりアホっぽい。アホ助と名付けよう。

「あんたも適合者なの？」

「まあね。」

ふっふっふ。完璧。いつもちゃんと礼儀ぐらいちゃんとしたら？と言ってるやつに見せてやりたい。

「俺は藤木コウタ。一瞬とはいえ俺のほうが先輩ってことで。よろしく！」

「こつちこそよろしく、アホ助。」

「いきなり失礼だな！」

なんか怒ってる。私の完璧な社交辞令にどんな問題があったのだろうか？これが理由もなく切れる若者ってやつ？うるさいし。やれやれ。そういえば興奮している相手は時間を置くことが大事ということを聞いたことがあるので会話をやめサクとじやれる。

「しかも無視かよ！放置プレイかよ！」

なんかさらに怒っている。訳が分からない。しかもうるさい。

「うるさいよ。周りの迷惑も考えなよ。サクだってほらこんな感じになってるし。」

これは獲物を狩る者の目だ。がるるる、って唸ってるし。ていうかこれじゃあ犬だよ。

そんな感じでコウタ？コウキ？コウミ？で遊んでいると「立て。」

ん？誰かなんかいった？「立てと言っている立たんか！」やっぱ誰かなんか言ってる？これ。

声のした方向を見るとなんかいろいろすごい服の人がいた。胸すごい。もみたくなる。

「聞こえていないようだな。」

普通の人なら全力で土下座しそうな声だねえ。だが甘い。そのぐらいでビビるか！私の人生経験なめるなよ！と思いつつもおっかない

ものはおっかないので立つ。ビ、ビビってなんかないんだからね。
…あんまり面白くないね。ツンデレ。

「予定が詰まっているので簡潔に済ますぞ。私の名前は雨宮ツバキ。
お前たちの教練担当者だ。」

絶対スパルタだ。この人。絶対鬼教官だ。

「これからの予定はメディカルチェックを済ませたのち……」

聞いてられない。もつと簡潔に。そう思わない？サクよ。あ、スパ
ルタに睨まれた。聞いてないのばれた
ね。これは。

「…榊博士の部屋に1500時にまで集まること。それまでお前た
ちはこの施設を見回っておけ。これ
からお世話になるフェンリル極東支部通称「アナグラ」だ。」

やっと終わったああああああああああああああああああ。
聞いてなかったけど。あと鬼に睨まれたのでウインクしてみた。
のちにこの少女はこれは人間がやる特訓なの？死刑宣告だと思った。
という訓練をやらされましたさ。

おしまい。

第二話 鬼教官のお話だよ（後書き）

全然進まない…

そういえばほかの方たちはどのくらいの間隔で更新してるのでしょう？

第三話 あいさつ編だよ。(前書き)

ユーザーネーム変えました。

あと主人公の名前だしてないことに気づいた。

第三話 あいさつ編だよ。

「これからどうするかな…」

ツバキの校長先生のお話的な感じの長い話も終わり（ん、校長先生って何？）時間まで自由ということなのでどうしようかな。どうしたらいいと思う？誰に聞いているのだろうね。

ちなみにサクはどこかに行った。勝手に猫が出歩いていい場所なのかな？

まあ普通の猫じゃないしいいやと結論しきてもう一度どうしようかな。よしブラブラしよう。本当は寝たいんだけど。部屋ないし。

それにしても地下なのに明るいとこだと思う。まあ暗いよりはいいとも思うよ。そのおかげか外より雰囲気は明るい。あそこにはなんか女性に付きまとってる男もいるし。変な服着た陽気なおっさんが店っぱいの開いてるし。でも店を見るのは初めてだったり。外は配給制なんだよねえ。配給所にはほとんど行ったことないけど。

面白そうだしとりあえず行ってみよう。

「新人の折原^{おりはら} 真白^{ましろ}です。かつこいいと思う偉人は真田昌幸です。以後よろしく。」

「さなだまさゆき？誰だ。」

知らないのが当たり前だよ。私は友達に教えてもらった。あの人のカッコよさを語ると広辞苑なみではないけど結構な文字数になるので省く。

あいさつした相手はもちろん陽気なおじさん。

「まあそんなの誰でもいい。俺はここでよろず屋を開いてる者だ。基本物資の補給はここでやることになるから結構重要なところになる。それなのに最近はこのをないがしろにする新人が多いんだよなあ。」

「それは大変ですねえ。私はただのかなり怪しいいわ、ないわーという店だと思いましたよ。」

「はっはっは、怪しい自覚はあるけどな。」

おお、珍しく初対面に怒らない人が。なぜかあまり多くない初対面の相手を怒らせることが多いんだよね。なんでかを友達に聞いたため息をつかれただけだった。私の完璧な礼儀作法にどんな問題が？さて、おっさんも店で忙しそうなので他を回ろうかなと思うけど、どうしよう。

「どうしたらいいと思う？」

「いきなりどうした？」

「なんでもないよ。」

じゃあねと言い残しそこを後にした。……そういえば名前聞いてないじゃん。

時間はまだあるので三回目のどうしようかな。ん、しつこい？わかった注意する。

そんなことを思いつつブラブラ歩いているとすごい露出の激しい人発見。スタイルいい。どうでもいいけど。

そのままぶらぶらしているとなんか新人くーんという声が。きつとアホ助のことだろう。次からはアホ助をちゃんと呼んであげようか真剣に検討していると誰かが肩を叩いてきた。ん、誰だろう。私の

ここに来てからの知り合いは多くない。よろず屋のおっさんは仕事
中だからない。サクは猫。鬼教官は名前を呼ぶ。んじゃあコウタか
なと思い最後にアホ助と呼んで次からちゃんとよぼうと決め振り返
る。

「どうしたの？アホ助？」

「……嫌われるようなことした？」

と思ったらコウタじゃなかった。ほらちゃんと戻したよ。ってそん
なことはどうでもいい。

その人はちよつとぼかんとした表情を浮かべていた。そりゃそうで
すよね。

「ごめん……。ちよつとある人物と間違えた……。」

「ううん、気にしてないから大丈夫。」

あなたいい人だ。これが普通なのかな？

「それで……ええと。」

「私は神器の整備をしている楠　リツカっていうの、これからよろ
しく。」

「え、あ、ああ、うん。私は折原　真白。よろしく。」

思わず少しぼかんとしてしまった。うすうす思っていたけどここは
外とは違うね。自分の行動にも問題があった気もするけど、あれは
仕方がない。

リツカは少しいかぶしげな顔をしていたけど何も聞かないでくれた。

「それで何か用事があったの？」

「え、ああ、そうそう。メディカルチェックの時間大丈夫？」

時計を見る。二時五十八分。つまり1500だから三時に博士の部屋。あと二分。

プラス聞いたところだと五分はかかる。

「うーん…どうせ間に合わないし、ゆっくり行く。」

「…いいの？」

「別にいいでしょ。」

そっいうわけで非常にリラックスしながら歩き始めた。

道に迷ったけど。

第四話 なぜ秒単位？だよ

「予想より1230秒遅い。ようやくきたね新型君。」

はい約二十分の遅刻。それにしてもなぜ秒単位？バカではないはずだ、博士らしいし。もしかしてあれかバカと天才は紙一重ってやつなのだろうか？

その秒単位で数える変人さん（たぶんペイラーさん）はすごいキツネ目だった。覚える特徴はこんなものでいいや、めんどい。そのほかにもう一人は金髪で無表情。全く考えていることが読めない。ずっと待っていたなら少しはいらだつてもいいだろうに。要注意人物として記憶しておこう。

「私の名前はペイラー・サカキ。ここアラガミ技術開発の統括責任者だ。以後君とはよく顔を合わせることになるけどよろしく頼むよ。」

「私の名前は知ってだろうから名乗らないけどよろしく。」

それにしても長ったらしいなあ。役職名。

「ああ、マシロ君だろう？確かに名前は知っている。さて準備はできてるし、今すぐ始めてもいいんだけど、その前にヨハンから話があるみたいだよ。退屈かもしれないけど、ちゃんと聞いてあげてね。」

「ペイラー博士。そろそろ公私のけじめを覚えてもらいたい。」

返事が返ってくるとは最初から思っていないのか、返事を待たずに自分の自己紹介にシフト。結構親しい雰囲気。

仲がいいようで何よりですねえ。

「適合テストではご苦労だった。私の名前はヨハネス・フォン・シクザール。このフェンリル支部を統括している。」

「結構なお偉いさんなんだ。それでずっと待っているとは暇な人だね。」

「君は敬語、礼儀を覚えたまえ。」

「え、敬語？なにそれおいしいの？」

「…改めて適合おめでとう。君には期待しているよ。」

あ、無視された。まあいいんだけどさ。

「さて、君が遅れてきたのであまり時間がない。そういうわけで私は失礼するよ。ペイラー、あとでデータを送っておいてくれ。」

と言って去って行った。雰囲気からして大物だねこの人。ただ地位が高いだけではなく、こう、なんというか…

それにつびたりな言葉を探すために唸っているとキツネ目ペイラーさんが注射器を持ちながらしゃべる。

「さて、そろそろメディカルチェックをはじめよ。そのベッドに横になって。」

「？、襲うんですか？」

冗談だけどさ。別にそこまで馬鹿じゃないよ？誰に言ってるんだろ？

「もうちょっと成長してからいうんだね。」

目線は顔のちょい下。要するに胸。

「ずいぶん失礼な人だね。」

そういつつも横になる。そういうエロ親父にも見えなかったし。第一自分でもこう…うん。

「次に起きるのは10800秒後になるよ。戦士のつかの間の休息というやつだね、それじゃあお休み。」

その声を最後に本当に眠くなる。何をやったのだろうか。まどろんだ頭の中で私は一つのことを考えていた。

だからなぜ秒単位？

「いやいや、少なくとも日常的にキスする間柄じゃねえよ！」

「ひどいつ、あの夜のことは遊びだったっていうのっ!？」

「なんもなかったよ!？今みたいに無意味なやり取りにつき合わされてたよ!？」

「はあ、やれやれ、これだからコウタは……なんか甘いものが欲しいなあ……」

というわけで、勝手に冷蔵庫を開ける。お、ガルガル君発見。もらっところ。

突っ込まないぞ…突っ込まないからな…などとコウタがつぶやいているが無視。

「普通女の子が自分の部屋に来たら喜ばない？」

「お前の場合は疲れるんだよ……」

そういつつもコウタも向かいの椅子に座る。根はいいやつなんだけどなあ……。

「アホだからなあ。」

「……………」

なんかこいつのペースにのったら負けだ、負けだ…とかつぶやいている。大変だねーと他人事のように思いながらアイスをなめる。あー懐かしいなあ。

幸せな顔をしてアイスを頬張りながらなぜかすこし赤くなっているコウタに話しかける。

「ほういえは、あいはとうしゅふの? (そういえば明日はどうするの?)」

「食いながら言っな。それと実家に帰ろうと思ってる。せっかくの

休みだし。」

そう、明日はゴッドイーターになってからの初の休日だ。一応基礎訓練も終わり、そろそろ実戦だからその前にゆっくり休んでおけ。とのこと。それにしてもよくわかったね。

「家族かあ…。」

「ああ、妹にも会いたいしな。」

「妹!？」

「?、どうした、そんなに驚いて。」

「いやなんでもない…。」

少しおかしかった。

「そつか…それならひとつっておきたいことがある。」

そこで言葉をきり一つの物語を思い出す。

幸せな物語。でも…

バットエンドで終わり、いまだに続いている物語。

「絶対に死んじゃだめだよ。本当につらいのは残された大切な人だから。」

無理だとわかっていてもそれを言わずにいらなかった。

第五話 休みの前日だよ。(後書き)

少し短いかも。

第六話 初仕事！正直めんどい…だよ

「うっ…怖かったよう…」

「…大丈夫か？。」

「いや、ちよつと休ませて…」

私は今、食材の…じゃなかった、贖罪の町というところにいる。理由はもちろんアラガミの討伐。

お相手の名はオウガテイル。雑魚中の雑魚。雑魚イズ・ザ・ベスト。初心者はずこれを殺りましようということらしい。

で、なぜ私になにかする前から、ノックダウンしているかというと、それはここに来る途中に理由がある。

「ヘリコプターなんか嫌いだ…。」

ヘリコプターが怖かったから。のっている間ずっと、今に落ちるんじゃないかと脅えて最終的には遺書を書く紙ないかなと探し始めたレベルだった。しかもこれから仕事のたびにヘリコプターらしい。

ゴツドイーター…ほぼ毎日ヘリ。

「やめたいな…ゴツドイーター…」

「やめたいというやつは多いが、そんな理由の奴は初めてだ。」

で、さつきから隣にいるのは雨宮リンドウ。上官だけど敬語を使う気はないよ？

ここからダウン回復のため十分経過

「よし、もう大丈夫。初めててくれたまえ。」

「なんで上から目線なんだ？俺、上官なんだが。まあいい、よしマシロ。実地演習を始めるぞ。」

「はい。」

「命令は三つ。死ぬな。死にそうになったら逃げる。そんで隠れる。運が良ければ不意を衝いてぶつ殺せ。あ、これじゃあ四つか？」

「逃げるばっかだね。」

「ああ、生きていりゃあ、いつか倒せなかったやつもそのうち倒せるようになる。」

「だったらさ……」

言ってしまおうか悩んだが結局は言った。

「いつそ死んでしまったほうが楽かもよ？」

「え？」

少し驚いているリンドウにそのまま続ける。

「確かに生きている限り、そのとき倒せなかったアラガミでも、経験を積んでそのうち倒せるかもしれない、でもそのアラガミを倒せたとして、それで？アラガミを倒す毎日であることは変わらない。そしてそのたびに怖い思いをしなくちゃならない。いつ死ぬかおびえながら。そんなだったら死んでしまったほうが怖い思いをしないで済む。」

リンドウは黙って聞いていた。そしてなにか答えようとするのを私は遮った。

「おまえは……。」

「なんてね、冗談だよ。ほら、さっさといい。」

なんで話したのかは自分でもわからなかった。

いきなりいた。それっぽいのが。
二足歩行。白。牙でかい！尻尾もでかい！

「あれが、オウガテイル？」
「そうだ。」

リンドウが肯定する。ふーんあれがねえ…

「リンドウ！後は任せた！私は見てるから！」
「いや、ふつつ逆だろうっ！？」

と、逃げようとした私の肩をつかむ。くそう、逃げれなかった。ばれるといけないので小声で話す。

「（だって、死にそうになったら逃げろって言ってたじゃん。）」
「（どこが死にそうなんだ？）」

「（あと、なんかあの体毛堅そうだし、正直言って面倒だし！）」
「…そんな理由なら大丈夫だな。とつとといけ。」

と言つて無理やりオウガテイルの前に引つ張り出す。鬼かつ！まあ、緊張ほぐしにもなつたし、いいや。

ちなみに私の神器は剣がロング。銃はスナイパー。盾はシールドにカテゴリされる武器。選択理由はカッコよくね？という個人的美的センスから。…いいの！別に！

とりあえず基本に忠実に銃撃してみる。狙撃銃とか言ってるけど狙撃って感じしないなあ。

「強いんだかわからないなあ…あ、ひるんだ。」

少しだけ。まあ、チャンスであることには違いはない、変形。剣モード。そのまますぎる。

そして、ブレードという名前の剣で切りつけ、そのまま二、三回連続で切る。やっぱり硬いな、切るといふか、削る？

それだけで死ぬほど甘くはなく尻尾を一回転させてくる。それをバックステップでかわす…が微妙に肩にかする。かすっただけでも結構痛い。肩は変な壊れ方するから要注意。

そして銃に変形させモルターを放つ。スナイパー…ファルコンとの相性は悪いはずだが今までのダメージからか軽く後ろに吹っ飛び、転び、無防備な姿をさらす。

「えーと、イタダキマース。」

喰らえと念じると神器の機関部から黒い何かの口のようなものが現れる。スサノオの腕みたいだなあと思いながら、オウガテイルを喰わせる。

バーストモード。ちょっと中二病くさい名前だと思うのは私だけ？

「結構、気分がいいなあ、これ。やめられなくなりそうで怖い……」

そしてそのまま、神器を思いっきり振り下ろす。それだけであれほど堅かったオウガテイルをやすやすと切り裂いた。そのままオウガテイルは生命活動を停止させた。

結論。あつけない。緊張して損した。だけでも…

「もー無理。」

とても怖かった。今の自分はよほどひどい顔をしているだろう。

思わず座り込んだ私をリンドウが見下ろしながらしゃべる。

「安心するのはまだ早いぞ。うちに戻るまでが任務だ。」

「いいじゃない。めっちゃ怖かったんだよ？」

「……………」

「どうしてだまるの？」

一瞬考え込むような顔をしたがすぐにいつもの顔に戻る。

「ふ、まあ、初めてにしてはよくやったよ。」

「わふっ」

いきなり頭をなでられ、変な声が出た。でもそんなことを気にしてはいなかった。心地よかった。どこか懐かしくて、優しく。そしてその懐かしい名を思わず口に出していた。

「お兄ちゃん…？」

「ん？なんか言ったか？」

「な、なんでもないっ。」

「…そうか。」

ふう、危なかった。あのまま聞かれたら答えてしまいそうだった。
わざわざ軽蔑される必要もない。

「さ、早く帰ろ。うちに戻るまでが任務なんですよ。」

「…そうだな。」

何気に主導権を私が握っていることに気づきながら、歩き出した。

自分がいつの間にか泣いていることには気づかなかった。

第六話 初仕事！正直めんどい…だよ（後書き）

マシロ「こんにちは。マシロです。作者のこんなことしたら面白くない？という思い付きによりスタート。続くかどうかは私の知ったことではありません（棒）。」

なんで棒読み？

マシロ「というかなんでわざわざ（棒）をつけるんですか？つけなきゃいけないでしょうに…。というか、ああもう敬語めんどくさい！今から普通にしゃべるから！私！」

勝手にやり始めたのに…

マシロ「うっさい！はあ、もうめんどい。疲れた。気分悪い。というわけで今回は終わり。…なんであるのかわからないコーナーだね。」

俺の自己満足！

マシロ「あっそ…」

外伝！というか伏線だよ

「ふむ…これはまた…」

研究室でペイラーはうなっていた。端末には折原マシロのメディカルチェックの結果がでている。

彼女の身体にはほとんどイレギュラー要素はなかった。予想以上に適合率が高かったのに少し驚いたぐらいだろう。

しかし、「すべて」ではない「ほとんど」だ。

余計なものが体内にあるのだ。本来あるべきではないものが。

それはペイラーも知っているもの。だが人間が体内に取り入れるものではない。そんなのきいたこともなかった。

理論のある程度は理解できる。しかし自分には出来ないだろう。

これを成功させるには何人の人間が犠牲になればよいのだろうか？

自分が立てた理論だと、確実に拒絶反応を起こし死に至る。

「ふう…わからないことばかりだね…」

だが不快ではない、逆に気持ちがいい。

こんなに好奇心を煽るものは久しぶりだ。

ペイラーは軽く笑う。

心底楽しそうに。

第七話 裏の顔。だよ

「お呼びでしょうか？お兄様。」

「来たか。要件はすぐにすむ。」

私は部屋に入る。部屋の中はアラガミの資料、よくわからない物、その他もろもろが乱雑に散らかっていました。この部屋がきれいになっているところを見たことがあります。ちなみに勝手に掃除しようとしたら怒られました。こっちのほうが落ち着く、勝手に触られたくないなどが理由でしょう。

その奥には一人の男がいました。その人物は私の兄。いつになく機嫌がよさそうに見えます。わかりにく過ぎますが。

「それで、要件とはなんですか。」

「ああ、ヨハネス・フォン・シックザールに取引を持ち込まれた。

内容は研究の資金を出す代わりに無条件でこちらの計画に協力すること。」

お兄様はアラガミの研究をされていて、ペイラーの研究成果がすごくて地味ではあるが、かなり優秀です。あくまで聞いただけで、私はあまり知りませんが。しかしその取引に私は少し違和感を覚えました。

「少し失礼ですが、あの人にはペイラー博士がいるはずですよ。今更アラガミ研究でお兄様に頼むというのはいささか不自然ではありませんか？」

「ああ、俺もそう思ったんだが研究関係だけでなく……いやこっちは本命だろうが……お前の力のほうが目的のような気がする。要求され

ているのも研究成果ではなく、無条件協力だしな。」

少しだけつまらなそうに言う。目的が自分ではなく私だからでしょう。

確かに私は今までいろいろなことをやっています。

要するに暗殺。ちよつと人には話せない仕事です。確かに並みの人間よりは有能のつもりではあります。まあ、あくまでお兄様のためだけで、それ以外の人のために、やるつもりはありませんが。

「それでどうするんですか？」

「ああ、受けようと思っている。資金とかそういうのではなく、あいつの目的に俺は感銘を覚えた。無条件に協力するのもやぶさかではない。」

珍しいこともあるものだと思いました。お兄様は良くも悪くもアラガミから人間を守る。そのためにだけに生きています。しかし他の役人は自分の保身しか考えないような人ばかりで、それにたいしてお兄様は正義感だけはりっぱで、あまりに非道なことをしている人は兄の頼みで私が葬ってきました。ちよつとした正義の味方です。その兄が協力するといっていることは志は立派なんでしょう。私は油断ならない人物だと思いましたが。

「とはいっても、さっきも言ったがあいつの欲しいのは俺もあることとはあるだろうが、基本はお前のほうだろう。お前、やってくれるか？」

そんなの聞かれるまでもありません。

「もちろん、やらせてもらいます。」

あの日、私は決断しています。断るわけじゃないじゃないですか。

「わかった。本来は俺が行く予定だったが明日七時にヨハネスのところに行ってこい。連絡は取つといてやる。」

「わかりました。」

「信賴しているぞ。俺の実験の唯一の成功体だからな。」

私は無言で一礼して部屋を出た。

「ということが昨日あり、私が代わりに来ました。」

「ふむ、そうか。」

連絡行っていないませんでした。代わりに私が今説明したところです。

「それにしても困ったものだな。」

「結構ずばらなんです。」

「が、あの者の研究は素晴らしい。」

「…そうですね。というかお兄様の実験にも興味があったのですか？」

「ふ、私が君を使いたいためだけの契約だと思ったかね？」

「ペイラー・サカキ様がいますので。」

「本来ならそうなのだが…その話は今度にしよう。」

その話は今度にしよう。要するに信用されていないということ。当然ですね。そこで話すような人なら今頃、路頭に迷っているでしょう。かなり厳しい世界なんです。フェンリルは。

「それにしても最初あつた時とはえらい違いようだな。」

「今はお兄様のためですので。」

「場合によつて変えているということかね？」

「…そんなことより本件に戻りましょう。この話は話の趣旨から逸脱しています。」

「うむ、それもそうだな。」

支部長も同意したところで改めて本題に戻る。

「それでは、本件に戻りましょう。お兄様はその計画に賛同を示し、契約に乗り気でいます。私は内容を知りませんが。」

「教えてくれなかつたのかい？」

「聞きませんでした。私に必要なことはありませんので。」

「そうか、兄に忠実な妹というわけだな。」

「あなたは話を脱線させるのが好きなようですね。…それで、契約は当初の内容で成立。これでよろしいのですか？」

「うむ、それで構わない。細かいところは本人と決めていくことにしよう。日時は追つて伝える。」

「わかりました、確かにお兄様にお伝えしておきます。それではこれから仕事がありますので。」

「うむ。」

それを最後に私はこの部屋から出ていくことにしました。どうもこの人は相手にすると疲れるんですね。長居はしたくないです。

「期待しているよ。マシロ君。」

後ろから聞こえた言葉は無視した。部屋から出て私は一息ついた。

「ふう、今日も疲れたなあ。」

この後にコクーン…なんだっけ？の討伐が待っていると思うと少しテンションが下がった。

第七話 裏の顔。だよ（後書き）

マシロ「今回は私とコウタでやることになったこのコーナー！ 続くとは思わなかったけどね。」

コウタ「俺もだ… 出番が来ることなく終わると思ってただけだよ。」

マシロ「それに一番最初だしねえ。最初の紹介で黄色くてアホッぽいとしか紹介されなかったのに。」

コウタ「そりゃお前がやったんだろ！… でもキャラ紹介適当だよな。リンドウさんにおいては名前だけだし。マシロはなんか聞いている？」

マシロ「ああ、前聞いたとことだと、これ読んでるのはほとんど原作プレイした人じゃね？ だったら別に紹介しなくともわかるんじゃない？ ということだったよ。」

コウタ「わかるような… 手抜きしたかっただけにも聞こえるような…。」

マシロ「まあそのとうりだし、いいんじゃない？」

コウタ「そうだな、想像にお任せてやつだな。」

マシロ「それじゃあ、今日はこれで終わり。感想カモン。だって作者が。」

第八話 コクーン…なんだっけ？だよ

「私はサクだにゃーにゃにゃにゃー。」

「…ツツコミどころが多くて困るんだけど。」

猫がしゃべったわけではない。サクで遊んでいるだけ。

「ねえ、マシロちゃん？いろいろ聞きたいんだけど。」

「なんだニャー、サクヤ。」

サクをサクヤの前にもってくる、逃がさないように後ろからがつちりホールド。何を言いたいんだろう？

「いろいろあるけど一つだけ…なんでここに猫を持ってきているの？」

ここは嘆きの平原。コクーン…ナンチャラがいるらしい。そいつら二体の討伐。そこで私はサクにいっしょに来てもらっていた。

「？別にいいでしょ、猫といっしょに行ってダメなんて決まりなかったし。」

「常識的に考えればわかるでしょ…。」

「私は常識なんて鎖じゃ縛れない。」

「要するに非常識なのね…。」

そんなルールがあっても来てもらっけどさ。いいじゃん、ヘリ運転してる泣く子も黙らずにさらに大泣きしそうな顔したおじさんも気に入ってたし。おじさんがサクに頼ずりしていたときはあまりにもシニールだったけど。

「だって、ものすごくへり怖いんだよ？それとも、サクヤは私にへりが怖くて、体が満足に動けない状態でアラガミと戦って死んでもいいと？私に死ねと？」

「そこまで言ってないわよ…まあいいわ。」

ため息を一つ。今ので幸せポイント減ったね。2ポイントぐらい。そしてサクヤは今までとは打って変わって真剣な顔になる、凜々しいとでもいうんだろうか？少し怖い気がする。気のせいの気もする。

「それではさっそくブリーフィングを始めるわよ。」

「という題名の愛の語らい？」

「……」

「ごめん。」

茶化せそうな気がしないよ…茶化してはいけない気がするよ…

「基本はマシロが前衛。私が後方からバックアップします。それと私から絶対離れないようにn…」

「離れてはいけない？一生？寝る時も？遠回しな愛の告白？」

「……」

「ごめん。」

もうやめよう…目が怖い。怖いよう…。

「ふう、なんであなたは緊張しないの？普通はがちがちに緊張する子が多いのだけれど。」

「…慣れ。」

サクヤとは生きている世界が違う。何か聞いたそうにしてたけどシ

カトで。

「はあ、まあいいわ…それでその子はどうするつもりなの。」

「あー…サクはどうする？ついてくるか残るか。」

「にやっ。」

間髪入れずに肩にとび乗ってきた。ついてくるつもりみたい。…なんでこんなに賢いんだか。世の中不思議に満ち溢れている。サクヤが邪魔にならないのか聞いてきたがそんな心配はいらない、軽いしいつも乗ってるし。思いつきり動いても勝手にしがみついて落ちないし。逆にうれしいのは秘密。

めっちゃかわいいんだよおおおおおおおおおおおおおお

「そろそろ時間だし、行きましょうか。」

「はい。」

「にやー。」

よいこの返事。サク、どうして返事できるの？

コクーン…なんだっけ？もういいやコクーンって呼ぼう。

コクーンの特長。移動しない、ピコピコ地味にレーザー撃ってくる。接近すると針？棘？でグサリ。大型と一緒にだとうざい。単体だとやっぱり雑魚。オウガテイル並み。

…全部ノルンに書いてあった付け焼刃の知識だけど。

…んでもって目の前にいま話題のコクーンがいるんだけど…。

「確かになんかうざいなっつ。」

ダッシュして近づきながら半歩ほど横にズレてレーザーをかわす。何でできてんのかなあれ。

そしてブレードで一気に切りかかる。そのまま2、3回切りつけ下がる。その瞬間、背後にいたサクヤの銃が火を噴く。そのまま銃形

態に変化させサクヤと同じレーザーを打つ。

それにしてもあまり当たらない。なんでサクヤは全弾命中？帰ったら練習しよう…

しかもそれだけで終わっちゃったし…コクーンさんお亡くなりになっちゃったし…見せ場なしだよこん畜生。

「ねえ、先帰っていい？」

「だめに決まってるでしょ。」

「代わりとしてサクにいてもらうから。」

「にやつ。」

「サクはいいってよ?。」

「だめよ。」

私いない気がしてきた。

二体目発見。実はレーザーを撃つことを知ってから一度はやってみたかったことがある…

「ねえ、ちよつと見てて。」

「?、何をするの。」

失敗しても死ぬほどの威力なさそうだしね。

というわけでさっきと同じように突進する。そうするとコクーンがやってくることはたぶん一つ。

それは…レーザー。

「よいしょつと。」

神器を振るい飛んでくるレーザーを切る。というか弾く。

弾丸切りならぬレーザー切り。いやレーザー弾き？…レーザー切りでいこう。

「おおう、ほんとに成功するとは…」

実は失敗覚悟だったり。

だが、成功すればかなりのチャンスになる。さっきみたいにわざわざ勢いを殺してかわす必要がなくなるから。

その甲斐があり、コクーンが次の行動に移るために態勢を立て直す前に接近することに成功。

「はあつ。」

そしてダッシュの勢いを殺さずに流れるように切る。勢いを一回切るごとに殺さず、加速させて。

「サクヤっ」

「任せて。」

そのまま五、六回切ることに成功し深追いしすぎることはなく下がる。距離をとった瞬間休みなくレーザーの雨がコクーンを襲った。さすが熟練ゴッドイーター。

私はさっき銃撃がほとんど当たらなかった経験を生かし、銃を使わずに射線に入ることのない上にとんだ。

「止めええええええええええ。」

そして落下のスピードを生かして剣を突き立てる。剣は深々と突き刺さり、雑魚だけあってそれでコクーンはこと切れた。

戦闘終了。ほっと一息。

「あー、剣の旧型神器でもよかったかもなあ。」

「ほんと、銃の腕は微妙ね。」

「あーあー聞こえないーい、私は新人だー新兵だー当たらなくても気にしなーい、次に期待しよう。」

「新人にしては戦い方が破天荒だったけどね…刀身でレーザー弾く人初めて見たわよ…そういえばあなた何か、戦闘訓練でも受けてたの？やたらと体の使い方がうまいけど。」

なに！？そこ見られてたの？油断した…ゴッドイーターはアラガミ倒すことしか能のないやつらだと思ってたのに…なかなか侮れない私は瞬時にどう答えるかを脳内検討し、半分ほどごまかす結論を出す。

「護身用程度にはね。」

「へえ、珍しいわね。」

「そうかな？…そんなことよりサクヤ。話しておきたいことがあるんだ。聞いてくれる？」

「ん、何？」

「私、思っただけど。コクーンさんは何のために生まれてきたのかな？家族や友達がいたのかもしれない。そんな一つの生物の人生を私は奪ってしまった。たった一つの人生。こいつはなんで殺されたのだろう。もしかしたら誰も殺さずに隠れながら生きてきたのかもしれない。もしかしたらそんな罪のない生物を…私は殺してしまったのかもしれない。」

さらに突っ込まれるのが面倒なので話をずらす。考えながらしゃべったから何言ってるのか自分でもわからないな。

「…帰るわよ。」

「待って！突っ込んで！スルーが一番つらいの！ボケに対してスルーが一番つらいの！」

「にゃー」

そんな話をしながら帰った。この人にボケるのはもうやめようと思った。

第八話 コクーン…なんだっけ？だよ（後書き）

マシロ「今回は私一人でやることになったよ。一人さみしくやれって…何をやれと？忘れられてそうだけど私の好きな人物「真田昌幸」について語れと？でもこういうのって聞かされている相手は面白くないって相場が決まってるし…みんなも自分の得意分野になった瞬間ものすごい勢いでしゃべるのはやめたほうがいいよ。テンション下がるから。普段喋らない人はさらにドン引きもされるから。作者は経験積みだつてさ。」

ふう…もう終わりでいいよね？私頑張ったよね？というわけでほんとに何であるのかわからないコーナー終了。あと感想もつと欲しいって作者が。というわけで感想待ってるよー。」

第九話 ソーマっちと一緒。だよ（前書き）

アクションシーンがひどい…

第九話 ソーマっちと一緒だよ

「やっと、到着…なれる日が来るのかな…。」

精神的にぼろぼろになりながら「ヘリ地獄」を切り抜け「鉄塔の森」に到着。着陸しまーす。

今回の任務内容はオウガテイル、コクーンの二体ずつ殺すこと。という内容だった。

そのミSSIONの名。それは「鉄の雨」だ！…ネーミングの由来が激しく謎だ。鉄製の雨でも降るのだろうか。

ちなみに今回同行する二人は先に現場に到着してるらしい。…なんで先に行くの？サクヤもそうだったけど。一緒に行っただっていいだろうに。

そしてヘリのドアが自動で開き、外のなんとなく嫌な空気が流れてくる。ふう、やっとヘリから降りられる…

「おっさーん、サク返してー。」

「おお、忘れてたぜ。それじゃあ、死なねえてえどに頑張ってこい。」

「ほいほーい。」

ほんとにサクが気に入ったのか、サクを抱いていた強面のおっさんからサクを回収しヘリから降りた。

「さーと、どこにいるかな…あ、いた。」

今回一緒にいる二人を探そうとしたらすぐそこにいた。あらあら二人で楽しそうに話して…はいなかった。片方暗い。もう片方が一方的にしゃべってる。あ、こっちに気づいた。一方的にしゃべってる赤毛のほう。

「やあ、君が例の新人君かい。話は聞いているよ。僕はエリック。エリック・デア・フォーゲルヴァイデ。」

長い！名前長いよ！めんどいなー。あ、エリックといえば…。

「そういえば、トイレも使えないアホなんだっけ？」

「君はいきなり何をいつているんだい？」

だって朝、清掃業者のおばさんが言ってたよ。どこの坊ちゃんだか知らないけど…以下略って感じで。

「ま、まあ、君も僕をみ…」

「エリック、上だ！」

「…ならって…う、うわあああああああああ」

直前にその何か危険なものに気づき後ろに跳んだ。その直後、視界が白い何かでいっぱいになる。

「ぼーっとするな！」

そこでもうやく何が起こったかに気づいた。それはオウガテイルだった。それをもう一人の男が切り裂きオウガテイルは絶命した。

そこにエリックはもういなかった。そこで私が感じたのはショックではない、可哀そうとか、危険な仕事ということを再認識したとかそういうでもない。

ただ、死体が残らないなら後始末の必要ないな。ということだった。人の死なんてすでにたくさん見てきた。そしてその状況を作ったのは私だ。今更そんなの見たってどうということはない。もう慣れた。

「ようこそ、このくそつたれな職場へ。俺の名はソーマ。別に覚えなくていい。」

「それじゃあ、ソーマっちで覚えるから。」

「ふざけるな。やめろ。」

「いいじゃん、かわいいし。」

これ以上言っても無駄だとも思っただのか、そこでいったん言葉を切り、さっきまでエリックがいた場所を見る。

「言っておくがこんなことはここじゃ日常茶飯事だ。」

そう言うとおもむろに神器を突き付けられた。

「お前は、どんな覚悟をもってここにきた…」

覚悟。そんなのとつくの前に決めている。

「ソーマっちが知らなくてもいいでしょ。」

「その呼び方はやめろと言ったはずだが。」

睨まれた。冗談が通じないタイプみたい。

「変わったやつだな…時間だ、行くぞルーキー。長生きしたければ、あまり俺にはかかわらないことだ。」

「どういうこと？」

その意味はよく分からなかった。

さて、さっそく探索を始める、目標はすぐに発見できた、四体全員。

「えーと。何か作戦的なものは…」

あるのかと聞こうとしたら、もうすでに隣にソーマはいなくアラガミの集団の中に飛び出していた。

…ああ、そう、勝手にやれってか。好き勝手やれってか。

「うわ、もうコクーンさん一体仕留めてるよ…早いなあ。ねえサク、このまま見てるってのもありかな？」

「…にああ。」

「あ、そう？まじめだよねえサクも。でもあんたは見てるだけじゃん。戦うのは私なのに。」

今更だけどある程度の意思疎通はできる。不思議だ…本当に猫なのか疑いたくなる。

「それじゃあ、銃に変形させて…ドーン。」

確実に私のことを認識してなかったオウガテイルに不意打ちレーザーをかまし、奇襲。予想外の場所から攻撃がきたからか、オウガテイルが苦しげに唸る。そのときにはすでに神器を剣に変化させ接近、オウガテイルがこちらを向くころにはすでに剣が届く距離にまで到達していた。

「そんじゃ、始めようか…。」

次の瞬間、神器を叩きつけ、そのまま次々と切りつける。不意を突いたおかげで相手の反応がどんどん遅れていく。相手が態勢を整えた時にはスタングレネードを放つ寸前だった。

「喰らえつと。」

次の瞬間にまばゆい閃光。それが晴れると無防備な姿のオウガテイルの姿があった。この機を逃さずに捕食。オウガテイルの細胞が体内に侵入してくる。それは体に害をなすことはなく、体内のオラクル細胞が活性化する。

「これで終わ…って危なっ。」

止めを刺そうとすると、どこからともなくレーザーが飛んできた。それをなんとかバックステップでかわす。危ない、危ない。コクーンのこと忘れてた。

止めを刺されるのを免れたオウガテイルはこちらに背を向け、逃げ

出そうとしていた。アラガミは弱ると逃げて回復する習性がある。それを見た瞬間に神器を銃に変形させさつき捕食したときに入手したアラガミバレットを放った。それは普通のバレットとちがい捕食したアラガミの特性を備えたバレット。その無数の棘は普通のバレットと比べ物にならない速さで飛んでいき、後ろからオウガテイルに食らいつき、倒れた。

「さーで、次は… ってもう全滅してるし…。」
「じゃあ…。」

いつの間にかソーマっちが全滅させていた。早っ。さすが先輩。

「お疲れ様。」
「…ふん。」

無視された。一匹狼タイプか… まっいつか。気長に付き合っていこうと。

「これからよろしく。」
「お前と馴れ合うつもりはない。」
「あっそ。」

今はこんな状態だけど。

第九話 ソーマっちと一緒に。だよ（後書き）

マシロ「さて今回も始まった何であるのかわからないこのコーナー。ほんとに謎なんだけど…」

リンドウ「まあ、作者の思いつきだしな。書いてるだけいいと思っただろうだ。」

マシロ「それも、そうだね…でも今回ネタないよ？」

リンドウ「それもそうだな…あー…そういえばお前は普段何してるんだ？サカキのおっさんが言うにはお前、アラガミの講習会サボってるらしいじゃないか。」

マシロ「ええーだってめんどいじゃん。勉強なんて嫌だよ。それと普段は…うん、ちょっと頼まれてることが山積みなんだよね。（ヨハネスの事を嗅ぎまわってるやつを順番に消しています）」

リンドウ「ふーん、そうか。大変なんだな、お前も。」

マシロ「そうでもないけどね。どうせやることないし。」

リンドウ「そうなのか？なんかないのか？バカラリーとか。」

マシロ「なにそれ？」

リンドウ「知らないのか？アラガミが出る前から、やってる。見たことのないやつでもほとんどの奴が知ってるんだが。」

マシロ「それどころじゃなかったからねえ。…よし。今回はこんなものかな?」

リンドウ「そうだな、あとはいつもどおり、感想書いてくれると嬉しいってさ。」

マシロ「待ってるよー」

第十話 戦闘一切なし！だよ（前書き）

難産気味…

第十話 戦闘一切なし！だよ

「はぁ…暇。」

さて、正直暇。アイス全部食べちゃったし。頼まれてる仕事も今は様子見をしていた。あ、ちなみに仕事するのは本部の犬の始末のこと。最近は警戒し始めて、なかなか尻尾出さないんだよねえ。しかも支部長の依頼だからいまいち乗り気になれない。従っているのは単に兄が頼みを聞いてやってくれといわれ仕方なく。

「部屋戻って寝るかな…。」

「おい、こら、俺が話してる途中だろうが。聞けよ人の話。」

そっぴや、コウタがいたんだっけ。

「ええー…分かったよ…ここで寝るから。」

「ちがうからな！？場所のこと言ってるんじゃない、寝るなってるんだからね！？」

「はいはいわかった分かった。それで、なに？ダイエットは根気よくやるのが大事らしいよ。」

「太ってないから、俺。」

「わかってるよ。それで何の用？」

このままやってるとエンドレスに続きそうだし、さっさと気のすむまで聞いてあげよう。全く、感謝してほしい。

「いや、同行してた人が亡くなったって聞いたからさ。」

「はいはい、わかった分かった。エリックは残念だったね。大丈夫。きつと天国で見守っててくれるよ。これで終わり。続きはCMの後。」

「さよーならー。」

「適当に切り上げるな！つたく、こっちは本気で心配してやってるっていうのに…。」

「へ？なんで？」

「いや、友達の心配してなんかおかしいか？」

「友達？いやいや、冗談はコウタの存在意義だけにしてよ。」

「さすがにひどすぎない！？」

ああ言ったものの友達、ね…よくわからないや。

「それじゃあ、私、アイス食べ終わっただし帰るね。コウタの相手は面倒だし。」

「…なんかもう慣れてきたな…はあ、そういえば、リンドウさんがお前をのこと心配してたぞ。行ってみたらどうだ？さっき部屋に戻って行っただし。」

「あつそ。それじゃあ私は部屋で寝るね。お休み。」

「いや、寝るなよ！俺の話聞いてた！？」

「ええー…しかたがない、暇だし行ってあげるよ。全く…」

「どんだけ上から目線だよ…。」

まあ、リンドウの事は嫌いじゃないので行くことにした。

リンドウ視点

「ほれ、特別に来てあげたぞ、なんかもてなしせい。」

「俺はお前の上官なんだがな。」

「はは、冗談だよ。」

いきなりノックもなしでマシロが入ってきた。まあ、俺もサクヤの部屋に入るときはそうなんだが…

こいつを見てると猫を思い出す。なんか自由気ままというかなんというか。普通にペイラー博士のアラガミ講座はサボってるらしいし。アラガミ討伐に行くときは普通に猫を連れて行ってるらしいし。非常識ともいえるかもしれない。どういう環境で育ったのか少し気になるくらいだ。

外見は見た目より幼く見える。常にぶかぶかの帽子をかぶってるところとかがよけいに。腰のあたりまで届きそうな黒髪はそのまま自然に背中に流れていた。その中でも印象的なのは目だ。

一見すると自由気ままな好奇心旺盛な猫の目。だが、それだけではない何かを感じる。底知れない何か。

目は嘘をつかない。俺の経験はそう物語っている。

とりあえずその椅子に座らせ、落ちついて話せる環境を作る。飲み物は残念だがビールぐらいしかないので出せない。

「そういえば、お前とあまりしゃべったことなかったな。」

「まあねーアイスない？」

「ない。なんか聞きたいことはあるか？」

「なんだないのか…うーん。聞きたいことね…。」

最近感じるのだがこいつは何も考えずにしゃべってる感じがする。

俺は前から気になっていたことがあったのでそれを聞いてみた。

「ないなら、俺から聞きたいことがあるんだが。お前、前に死んだほうが楽とか言ってたな。どうしてそう思うんだ？」

俺が新人に最初に言っていることにたいして結構怪訝そうな顔をす

るやつも多い。要するに生きて経験を積みつて言いたいんだがな。だがこいつは特に怪訝な顔もせず死んだほうが楽じゃないかと言ってきた。それが結構気になっていた

「ああ、あれに深い意味はないよ。昔そういう人を見ただけ。」

「…そうか。」

なにがあつたのか詳しく聞かなかった。とても暗い目をしていたから。それもすぐに消えたが。

「だから別に私はリンドウの命令が気に入らないわけじゃないよ。人として最後まで生きようとするのは正しいことだと思うし。でも…。」

そこでマシロは言葉を切り、世間話のようにその先を口にした。

「リンドウはそのうち誰かをかばって死ぬ気がする。」

「…っ！」

言葉に詰まった。それで死ぬかはどうかは別だが、他人と自分の命だったら他人を選ぶ気がした。

「かばうのなら自分も生きなきゃダメなんだよ。かばわれて死なれて。かばわれた人はどう思う？」

それは真実味を帯びていた。まるで自分がそうだったといわんばかりの声。だが次の瞬間にはそれも消えていた。代わりに自分の行動に疑問を持つような顔をしてたが。

「まあ、勝手な思い込みだけださ。」

「お前は経験したことあるのか？」

聞いていいものかわからなかったが聞きたくなっていた。

「ちよつと違うけどね、私が生きるために自分から犠牲になった人がいたっただけ。」

「そうか。覚えておこう。」

「そうするといいよ。」

場に沈黙が下りる。何を言っていないかわからなかったからだ。マシ口は何を考えているのかわからない。

「今だに思うことがあるの。」

不意にマシロが口を開いた。その声は少し震えていた。

「私が生きるために死んだ人のこと、実は恨んでたんじゃないかって。私がいなければ死ぬことはなかった。皆に愛されて必要とされてる人だった。そんな人が私のせいで死んで。その時の気持ちを知らるのが怖い。」

何があったのかはわからない。まだ、付き合いの浅い俺に話すこともないだろう。だから、俺に言えるのはこのぐらいだ。

「変な話したね。戻るよ。私。」

その顔は精神が不安定な子供そのものだった。自分に芽生えた感情に戸惑っている子供。

「お前にどんなことがあったのかは知らないけどさ。」

「うん？」

すでにドアに手をかけているその背中にしゃべった。

「そいつは自分で選んだんだろ？恨んではないと思うぞ。」

「…うん、そうだったら…いいな。」

その声は少しだけ明るい声だった。

マシロ視点

最近ここに来てからなんか変だ。

何かそわそわするし。むかむかするし。ずっとこうしていたいって気分になったりするし。

顔がにやけてたりするし。無性に誰かを殴りたくなったりするし。誰かと一緒に居たいって思ったりするし。

さっきはリンドウに少しだけ喋っちゃったし。

「もう、自分で自分がわからない…」

前まではそんなことはなかった。兄から人の名前を聞いて。その人を殺して。その毎日。

こんな気分になったことなんて一度もなかった。

「これが当たり前なのかな…」

自分でもあの状態が異常だというのはわかる。まず、普通の子供の

やることじゃない。それは今でも。

この感覚は嫌いじゃない。好きなものかもしれない。だけど、それと同時に邪魔なものでもある。こんな状態で人を殺せるかつての。

そつえば昔誰かが、お前は人として大切なものをなくした欠陥品だよ。って言われたことがあったなあ。意味は全然わからなかったけど。

「さてと…。」

部屋に戻り、一度思考を打ち切り、机の中からあるものを探す。それはすぐに見つかった。

それは一枚のぼろい手紙。今は亡き人からの。

「…咲希…。」

開こうとするも…それはできなかった。

「やっぱり無理かな…。」

まだ、真実を知りたくなかった。この感情を怖いというのかもしれない。

生命の危機に感じるものとは別の「怖い」

第十一話 過去編だよ

「あれ？なんだろう…。」

二つの聞きなれない足音。片方はお兄ちゃんだけど…ここにすんでるのは私とお兄ちゃんだけなんだけどな…

そしてその足音が部屋の前で止まり少し遅れてノックの音。

「入るぞー。」

返事を待たずにお兄ちゃんが部屋に入ってくる。私もあまり気にならないので別にいい。その後ろに影になっていてよく見えないが、人がいるのはわかった。

「お帰りなさい。お兄ちゃん。」

「ああ、ただいま。ほれ、お土産。いつものアイスだけだな。」

「うっん、それでもうれしいよ。ありがと。」

いつもの棒付きアイスのガルガル君。さっそく頬張る。はあ…おいしい。

それでその後ろの人は？聞こうとしたその時だった。

「か、か…。」

「ふぁひ（なに）？」

「可愛すぎるうううううう」

「ひゃわ！な、なに…。」

いきなり後ろにいた人に抱きつかれた。アイスはぎりぎりで守りきった。く、苦しい

「なに。何なのこの子は！あーこの肌触りもたまんないーねえ、持ち帰っていい？というかカオルとホントに血が繋がってるの？あもっそんなのがどうでもいいくらいに可愛いよお。というか…」

「やめとけ。窒息しかけてるだろうが。」

そうしてお兄ちゃんが強引に引きはがしてくれた。死ぬかと思った…一息つき、呼吸を整える。そして改めてその人の特長をチェック。おそらく美人の部類に入るであろう女性。長い綺麗な黒髪が印象的。お兄ちゃんと同じ年ぐらいに見える。ええと…

「ま、まさか…お兄ちゃんの彼女…？」

「違うわ！」

頭にチョップされた。

「痛いよう…病人になんてことを…寿命が二日ぐらい縮んだー…はっ、そんなに慌てるということはまさか凶星…」

「違うわ。お前を一人部屋に残しておくのは不安だからこれから俺がいない間、世話をしてもらうことにしたんだよ。この前言っただろ。」

なるほど。そういえばそんなことを言ってた気がする。でも…。

「あんなふうに抱きつかれるの嫌なんだけど…私。」

「ひどいなあ、そんなたくさんはしないよ。」

「ほんとですか？」

「ほんとほんと。信用なさいって。」

「…分かりました。」

まあ、いいか。せっかくお兄ちゃんが連れてきてくれたんだし。無

下に断る気もない。

「私は咲希っていうの。奏上^{そうじやう} 咲希。これからよろしくね。」

「私はマシロっていいいます。これからよろしく願いします。咲希さん。」

ペコッと頭を下げる。ベッドの上で半分布団にはいりながらだけれど。

「やっぱり、可愛すぎるわよこんちくしょおおおおおお。」

「だ、だからやめてくださいって…。お、お兄ちゃん助けて！」

「ああ…もうあきらめろ。」

「この人でなしーーーーー！」

これが、最初の出会い。たくさんのことを教えてくれた人との。

きっかけというのは後になって「ああ、あれがきっかけだったんだな」って思うものなのだろう。

第十一話 過去編だよ（後書き）

マシロ「今回は二つ同時更新。頑張ったね作者。」

ああ、頑張ったぜ！

マシロ「…私も昔はあんなだったんだなあ。」

まっ、人は変わるし。今後たまに過去編をはさむ予定。

マシロ「ふーん…まあ勝手にやってるといいよ。」

あっそう？それじゃあこんな感じでどうしてあんな性格がだったのがこんな多重人格っぽくなったのか。こうご期待！

マシロ「いるの？期待してる人？」

いるさ、少しぐらい。

マシロ「いるといいね。」

あ、あと感想けると嬉しいです。ここに来るたびに感想書かれてないかなーって楽しみにしてたりするので。

マシロ「あんま書かれてないけどね。」

うっさい。

追記 プロローグを投稿してみました。

第十二話 雪！だよ（前書き）

遅れてすみません！

この前の地震でここらへんが停電になってしまいました…

第十二話 雪！だよ

1 まず、雪を丸く固めます。多少変でもOK
2 それを誰かにあてたくなるのはぐつと堪え、雪の上を転がします。まっすぐだけだと完成度が下がるので注意。

3 1、2を繰り返します。

4 最後は二つの雪玉ができているはずなので二つを重ねます。

5 飾り付けをすれば、完成です。

「じゃーん。雪だるまー」

「いや、つくるなああああああああああ！」

「いたっ！何するの、いきなり！」

背後から頭を叩かれた。馬鹿になったらどうすんだ！

「何すんのじゃねえよ！人に闘わせといて雪だるま作ってんじゃねえよ！なに？ある意味大物なの？ねえ！」

「へ？雪を見たら雪合戦、雪だるま、かまくらは当たり前でしょう。何言ってるんだか…」

なんか怒ってるし…牛乳飲んだら？そう思いながら、呆れ気味に言い返すとコウタはなんかあきらめきつた眼をしていた。

「…そうだよな…分かった…お前に常識を求めた俺が悪かった…。分かったからお前も戦え…」

「えーまだかまくら作ってないのに…しょうがないな、わかったよ。さて…」

正直嫌だったが、コウタがシャレにならない眼をしていたのでうなずいておく。

さて、まず状況の説明をしよう。

まずここは…ええ、と…たしか最初の文字が「魂」という文字だった気が…まあいいや。何とかの寺とかそんな感じのところ。雪が積もってる。一年中。

ターゲットはコンゴウ、オウガテイル×3匹。

そこで目標は複数だし手分けした方が効率がいいと両者の意見が一致したところで、二手に分かれていた。そこまでは良かった。よかったんだよ。

でもさー雪をみたら居てもたつてもいられずに冒頭の雪だるま作りしたくなっただよ。雪を見たらどうしてもやりたくなっただよ。

さて、状況説明終了。

そしてなぜかどこかに行こうとしているコウタを呼び止める。

「ん？コウタどこ行くの？」

「どこって…コンゴウを探しに。」

「それなら、もうすぐあっちからくるよ。」

そういつた瞬間のこと。上の建物の屋根の上から突如大きい何かが飛来する。ちょうど私とコウタのあいだ。

特長は…ええとーゴリラ？黄色っぽいゴリラ？たぶんこいつがコンゴウだろうとはおもっけど。

「ほら、来たでしょ。」

「…どうして？」

「さつきコウタが叫んだからねー。コンゴウ耳良いし。」

コンゴウはものすごく耳がいい。離れたところで戦闘を行ってもすぐに音を聞いて飛んでくる。そんなコンゴウがさっきの「作るなああああああああ」というコウタのツツコミ聞き取れないはずがない。

「ほら、ぼーっとしてると死ねよー。」

「へ…、うわっ！」

コンゴウがコウタに殴りかかっていた。コウタはそれを横にとびぎりぎりでかわす。

そして、こうなると位置的に私はコンゴウの死角にいることになる。

「さてと…いただきます。」

全く緊張感もなく背後から捕食形態に変え捕食。なんか気分がいいわこれ。いつだったか出回った麻薬っていうのはこういう気分させるのかもしれない。

そしてそのまま尻尾を思いっきり切りつけて結合崩壊させ、続いて無防備な背中を連続で切り付ける。コンゴウは苦しげに唸ると、こちらをにらみそのままこぶしを叩きつける。だが予備動作から攻撃に移るまでが遅いので軽く後ろに飛んでかわし、距離を取りながらその拳に空を切らせる。離れた瞬間にコウタが何発か弾丸を放っていたが…半分くらい外してる。あ、ちなみにコウタの神器は銃の旧型。

「ちゃんと狙いなよ…どんだけ外してるの…。」
「わ、悪い…。」

私も苦手だけどそこは棚に上げておく。

だが外してはいるものの数発は当たっているので牽制にはなったようだった。わずかに動きが鈍る。どちらを狙うか迷ったのかもしれない。

その隙を逃す気はなくダツシユで接近しコンゴウとの間合いを詰めながら頭に向かって神器を振るい仮面っぽい顔を破壊する。

中途半端にダメージを与えたからかコンゴウは雄たけびをあげながら右のこぶしで殴りかかって来るが、それを左に回り込んで避けつつ、脇腹あたりを切りつける。その斬撃でコンゴウは見事に倒れる。死んだわけではないけど。

そこまでの事を二秒ほどでやりおえ、倒れている間に一旦下がる。

そこにコウタの銃弾による追撃。

そこに私も銃に変形させ顔に標準を合わせ銃弾を引き金を引く。動きが止まっている奴を外すほど下手ではない。

「だいぶいい調子かな…。」

撃ちながらつぶやく。こうもうまくいつてるのは最初に捕食できたことが大きい。捕食できる隙ができたのはコウタのおかげでもあるから少しは感謝してやってもいいかもしれない。ここからどうなるかはわからないけど。ここからが本番。

グガアアアアアアアア

コンゴウは立ち上がるとまず人間には出せないであろう雄たけびを上げる。アラガミは怒りでオラクル細胞が活性化し普段とは比べものにならない戦闘能力を発揮したりする。このことを活性化状態というらしい。ってノルンに書いてあった。たぶんこれの事。

その情報道理さつきとは比べ物にならない速さで突進やら拳やらで怒涛の攻撃を私に向かって放ってくる。

「なんで、コウタを狙わないかな…」

それでも余裕がなくなってきたとはいえ、まだぎりぎりかわせるレベルなので次々にかわしていく。

だが、すべては躲せなかった。

コンゴウの突進がわずかに当たる。わずかとはいえ態勢を崩されるには十分だった。

その時、コンゴウの背中あたりの空気が不自然な動きを見せる。

まずいつ、と思った瞬間。コンゴウの背中から圧縮された空気の塊を放出。叩きつけられた。

「きゃっ。」

一瞬の浮遊感のあと、木製の壁に激突。吹き飛ばされた。

「大丈夫か!？」

「平気だよこのぐらい。」

背中がいくらか痛むけど、このぐらいは問題ない。

コウタが銃撃で気を引いてる間に立ち上がり態勢を立て直す。

「お返しつと。」

コウタに気を取られている間にコンゴウの死角から捕食。右腕あたりを丸々喰らう。

「コウタ!止めを。」

「任せろい!」

コウタは残っている銃弾をすべて、右腕を失った不安定なコンゴウに叩きつけた。

コンゴウからすべての力が抜けた。

第十三話 ウロヴォロスとか、新キャラとか。だよ

「ふう、ヘリ以外の移動手段ってないのかな…」

「ニヤー。」

「ん？毎日付き合ってやってるんだからなんか頂戴って？あー、マタビでいい？」

「にやつ。」

「それじゃあ、今度の週末ね…万屋のおっさんに頼めば仕入れてくれるかな…いや、それ以前に作ってるところあるのかな…？」

サクとそんな会話をしながら、すでにエントランスにはいつて姿が見えないサクヤ、コウタ、ソーマを追いかける。

今回の任務も無事終了し、アナグラに帰ってきたところ。ん？何を倒したかって？どうでもいいじゃん。終わったんだからいいいの。説明が面倒とかじゃないからね？

今日リンドウは不在で、誰かとデートとがあるらしい。サクヤが心配そうな顔をしていたのでもしかしたら別の何か危ないこともかもしれない。何かは心当たりが多すぎてわからん。

そんなことを考えながらすり落ちてくる帽子を持ち上げる。ゴムとが入ってないから簡単に落ちてくるんだよね。

「ん…一人足りなくねえか？」

「マシロならすぐに来るわよ。」

ボーっとしてる間にすでにみんなはエントランスでリンドウに任務の報告をしていた。リンドウ先に帰ってたんだ。ってなんか酒臭い…

「なんか、酒臭い…」

「はは、悪いな。で、任務のほうはどうだった。」

「ご命令に従って、いつもどおりだ。」

相変わらず冷めてるかんじで報告するソーマ。その隣で大げさなデ
ンションで報告するコウタ。

「俺たちの華麗な連係プレイを見せたかったよ！」

「一回私に誤射しなかったけ？」

「あつ…そういえば…」

忘れてたの？ちなみにコウタには報復として放射系バレットで吹き
飛ばしておいた。

「そうか、そんなら、俺もデートの回数を増やしてもよさそうだな。」

「それより、俺に女の子を紹介するのが先じゃないですかね。」

「ふっ、お前の手におえないと思うぞ？」

そんなリンドウとコウタの会話をよそにサクヤは心配そうな顔をす
る。

「リンドウも無茶をしないでね。」

「ん、ああ、わかってるよ…そんなじゃあ、解散！」

リンドウはまだここでビールを飲むつもりなのか、立ち上がりはせ
ずに、ひらひらと手を振る。

特に用事があるわけでもないので私はさっさとエレベーターに乗り
込もうとしたが、突然流れたアナウンスに足を止める。

『第七部隊がウロヴォロスのコアの剥離に成功。研究員は至急第』

ウロヴオロスというのは簡単に言えば強敵の代名詞みたいなもの。とてつもなくデカくて、無数の触手に無数の目が特徴のアラガミだったはず。そのコアね…

「ウロヴオロスって何？強いのか？」

コウタは知らなかったのか、隣にいるソーマに質問する。

「たまには自分で調べろ。」

「ええー教えてくれたっていいじゃんよー。」

「そうね、私たちじ…。」

そこまで聞いたところでそれ以上いても面白いことはなさそうなのでさっさとエレベーターに乗り込む。話に夢中でおそらく誰も気づかなかったと思う。ウロヴオロスとかにあまり興味ないんだよね。というかそれよりも…

「さて、マタビってどこで手に入るかな…。」

こっちのほうが必要だったりする。

「あれ、マシロ？どうしてここに？」

「へ？」

「…にやあ…」

「この嫌われようはやっぱりサクか？」

エレベーターの中で声をかけられた。聞き覚えはない。サクが威嚇してる。

声をかけられた方を見るといかにも冷めた感じの同い年ぐらいの青年がこちらを見ていた。

服装はジーンズにＴシャツ。髪は少し長めで、銀髪。目は本来は白い部分までもが青かった。

…ええとー見覚えはあるような…

そんな私を前に、忘れかけられていることに気付いたのか青年Aは自分から名乗っていた。

「ルアだよ…ちゃんと覚えろよ。」

「ああ、誰かと思えば。」

思い出した。

「なんでいるの？というかやっぱり生きてたんだ。」

「当たり前だろ。つうかあれで死ぬような奴はいなかったよ。たぶんどこかで生きてるだろ。」

「だよねえ…。」

脳みそはともかく、腕は確かな奴らばかりだったし。

「それで、ルアはどうしてここにいるの？3文字以内で説明せよ。」

「無理だ。ここにおいてある神器に適合したんだと。」

「へえー…残念だったねえ。」

「なんで？」

「早死にするよ。この仕事は。」

「どっちも変わんねえよ、元の仕事も似たようなもんだ。お前だつてよく知ってるだろ。人なんて結構簡単に死ぬ。ちよつと銃弾で貫かれれば死ぬし、ナイフで手首を掻つ切つても死ぬ。」

「…それもそうか。」

一緒に乗っていた職員が少し気味悪そうにこちら見ていた、まあこんな話を全然冗談っぽい口調で言つてなければね。普通に掻つ切るとか言ってるし。まあ、そんなの今更だ。

「あれ？そういえばリンは？ついに愛想をつかされた？」

「…こつそり出てきたのに…着替えのカバンの中に忍び込んでやがった…。」

「まあ、いいじゃない、かわいいし。」

「最近はストーカーじみてきてんだよ…。」

さっきの人が死ぬだのなんだのという話を平静そのもので話していたのに、この話題になった途端一気に疲れた口調に変わっていた。こいつ相手によくまあ…よほどすごくなつたらしいなあ。あ、新人区画到達。私はここで降りる。

「それじゃあね、後で会いに行くかもしれない。」

「いや、その必要はない。」

そういつて、げんなりしながら喋る。どういうこと？と思いながら、エレベーターのドアが開く。

そこには十歳ぐらいの女の子が。長い髪は両サイドでまとめてあり世に言うツインテールでたれ目気味。うーん、小動物みたいで可愛い。その女の子は…

「ルアー！会いたかったよーーーー！」

いきなりルアに飛びついていて。周りの職員ドン引きしてるよ？

「ぐはっ！頭がちょうど鳩尾に！鳩尾に入ってるから！離れる！」

「おーう、痛そう…。」

ものすごい勢いだっとなあ、今の。というか、ルアは本気で離そうとしてるっぽいのはなんではがれないの？十代後半の男と十一、二ぐらいの女の子だよ？

「さびしかったよー会えなかった一時間四十五分二十二秒が悠久の時に感じられたよう。」

「どんだけ細かく計算してんだ！いいから離れる！恥ずかしいという精神的ダメージと鳩尾への物理的ダメージで死にそうになってるから！」

「むう…分かったよ、あとでたっぷりまた抱き着くから覚悟してよね…って、あれ？マシロお姉ちゃん？サクちゃん？何でここに？」

「二人そろって似たような反応だねえ、リンちゃん、久しぶり。」

「にゃあー」

サクもうれしそうに返していた。サクってあんまり人になつかないんだよね…ルアに対してだってあまり仲は良好とはいえない。

「それにしても…もう吹っ切れたみたいだね。」

「うん！マシロお姉ちゃんの教えてもらったとつりに遠慮なく愛情をぶつけてるよ！」

「…お前のせいだったのか…。」

リンちゃん。本名リン・ルアルディ。ルアとリンは…まあ兄弟みた

いな？そのあたりの事情とどうして知り合ったのかはまた別の話と
いうことで。

ちよつと切りの悪い気がしないでもないけど今回はこれでおしまい。
次話に続く。

第十四話　ちよつとした裏の仕事だよ。

今いる場所は最近できたアラガミを崇める団体「カルト教団」の儀式とやらをしているところのあつちから見つからないところに隠れていました。外部居住区のそれなりに広い広場です。

何をしているかというと今までは実害もなく放置されていましたが、先日フェンリルのお偉いさんの娘さんが拉致られるという事件がありました。

それに対し、この事件の責任者になったお偉いさんがお顔真っ青で殲滅を決行したんです。失敗したら確実に責任者さんの首が飛びますね。関係ありませんが。

手順というか私の役割は生贄（さらわれた娘さん）の救出。後に武装した部隊がカルト教団を殲滅することになっていました。少し離れた場所待機しています。

脅威になりそうなのは銃火器を持ち外を厳しい目で監視している五人ぐらいで、これなら外で待機している部隊で何とかなるでしょう。

その間、ずっと、儀式の前ふり演説が続いています。

「アラガミ様は神様からの使いなのだ！人間が滅びるのは神の意志！ならばわれわれは神の意志に従おうではないか！」

すごいこと言ってますね。だったら自分たちが死んだら？といったくなります。神様も喜びますよ。たぶん。

「我らの敵は神の意志に逆らおうとしているフェンリルだ！奴らはアラガミさまを殺すだけ殺す、こんなことを許していいのか？断じて否！だいたい奴らは我らに対して何もせず、我らの生活は豊かになることもない、そんな奴らに……」

…後半はもう関係なくありません？神様の意志どこにいったんですか？それでも大衆の皆さんは、そうだ、そうだ！とか声を上げてます。訳が分かりません。わかりたくもありませんが。

はあ…これ以上聞いてられませんか…そろそろ時間でしょうか。そう思った矢先…

パン！

いきなりの銃声とともに生贄を守っている二人のうちの一人の胸に赤いしみがうまれます。それが広がっていきバタリと倒れました。それが血だと一般大衆が気づくのに時間は必要なく、再び銃声が響き、狙いたがわずにもう片方に当たり絶命します。

キャーーーーー！

誰かの悲鳴。それが呼び水となり会場が混乱し儀式がめちゃくちゃになります。

それを確認し私は高台から飛び降りました。普通の人間なら骨の二、三本は折れる高さです。

潜んでいた場所はちょうど生贄の上ですぐ隣に着地します。生贄の女の子が目を丸くしてました。まあ驚きますよね。うえからいきなり人が落ちてきたんですから。

それにたいして特に答えはせず手際よくナイフで縄を切る。

「さ、逃げますよ。ついてきてください。」

「え、えと、お姉ちゃんは…。」

「早くしてください、死にたいですか？」

そういうとすぐさまコクコクとうなずいた。それを見届けて…。

「行きますか…。」

女の子をおんぶして走り出しました。

ルアSIDE

「おしまいっと。」

狙撃銃の構えを解き肩に担ぐ。報酬分は働いたしもう十分だろう。それにマシロは優秀だ。この狙撃すらなくても十分行けただろう。つまり、作戦は簡単でまず俺が狙撃し会場を混乱させる。戦闘用の部隊とかならまだしも、相手のほとんどは一般人。簡単に混乱に陥れることができるを見た。実際に成功したし。

そしてその間にマシロが生贄を救出。単純だね。

なぜ二人でしているのかというと依頼主は俺とマシロの二人に依頼していた。よほど失敗したくない作戦なのだろう。なぜかは知らない。クライアントの事情はきかない。報酬さえ払えば何でもやる。それが俺の流儀。

とまあ、そのことをたまたまお互いが知り、だったら協力しようということになったのだった。

「さてと、どうすつかな…。」

これからどうすっかなあーと考えながら、空を見上げる。

マシロSIDE

「さ、あのおじさんたちのところに行けば後は安全です。それでは。」

「あ、あの！」

「どうかしましたか？」

殲滅のため待機していた部隊を指さしてそちらに行くように促します。逃げるのは簡単でした。というか誰も気づかなかったんじゃないですかね？あの人たちがどうやってこの子を誘拐できたんだかわかりません。というかこの子すごい落ちついてますね。なかなか見どころがあります。

「え、えと…その…。」

「……………」

続きを黙って待ちます。

「た、助けてくれて、ありがとうございます!」

「!?!? あ、いや…えと…ど、どういたしました…。」

不思議でした。たった一言なのにどうしてこんなに感情が乱れるのでしょうか?

感情はこの仕事をするのに不要なものです。

怒りは周りを見えなくさせ。

憐みは相手を喜ばせ。

傲慢は油断を呼び。

欲望はいらぬものまで欲し。

喜びは刃を鈍らせる。

私がこの仕事を始めてから最初に学んだことです。

少なくとも私が知っている限りでは感情を自在に操れば一人前でした。

それなのに…こんなに心が揺らぎます。でも…

「そ、それじゃあ。」

「あ、はい、それでは。」

それを最後に女の子は去っていきました。これで仕事は終わり。後は兄様に報告して、おしまいです。

その時、後ろからいきなり声がかかります。近づいてくるのは気づいていましたが…。

「よっ、お疲れ。」

「ルアさんですか…気配を消して後ろから声をかけるのはやめてもらえませんか？というか、なんでいるんです？」

「いや、お前を待っててみたんだよ。たまにはいいかと思ってな。」

そのことに少し…いや珍しく本気で驚きました。

「ずいぶん変わりましたね。リンさんの影響ですか？」

「まあ…そうかもな。というかお前に人のことが言えるかよ。前までだったら俺の事なんか無視して、さっさと帰ってたぞ。」

「…そうですね。」

自分ではよくわかりませんね。でも…。

「…私はまだ欠陥品のままですか？」

それに対してルアは…

「ああ。変わったとはいえ…な。」

そう答えた。

第十七話 ペイラー…あの野郎っ！…だよ

ピピピピピピっ…

「うるさいです…。」

ガチャっ

「お休み…です…。」

「いいから起きろっつての。今何時だと思っつてんだ。」

朝起きてみたら目の前に男の人がいます。あ、でも、誰かに雰囲気似てる気もするです。えーとですね…。確かですね…

「あ、お兄ちゃんですかー…？。」

「いや、違うが。」

違ったみたいです。それじゃあ…えーと…ふわあ…眠いです…。もうどうでもいいです…お布団にもぐりこむです。えいっ！
…ふう…あったかいです…。

「ったく、また寝ないで起きろ。…なんか俺お母さんみたいだな…。」

「あつ…寒いです…お布団返して…。」

お布団を取られた…寒い…。って、あれ？なにしてるんだろ私…。

「ってあれ、リンドウ？何してるの？確か私の部屋だよな？ここ。」

「…お前、あれは寝ぼけてたのか？」

なんか、起きたらリンドウがいてこっちを見ていた。え？なに？どゆこと？

「まあいい、サカキのおっさんが話があるんだと。研究室に来いとお達しだ。」

「だからって部屋に入らなくても…あれ？もしかしてリンドウ…寝顔見た？」

「うん？ああ見たが。」

あれ、なんか恥ずかしい…なんで？寝顔見られたくらいで…。慣れてないからかな。

「はあ、まっいつか。起こしてくれてありがと。着替えるから、出てもらえる？」

「はいよー。」

いつものように軽く返事をしながら、リンドウは出て行った。さっさと着替えてしまおうしよう。

なぜかこの前兄さんが買ってくれたやたらピンクのふりふりのついた服を脱ぐ。パジャマかどうかは知らないけどさ。

兄さんの行動はほんとよくわからない。普段はあまり話もしないし、するといつても事務的なことぐらいなのに、たまにこういう服を買ってくれたりするし。あまり着てないけど。せっかくだから部屋にいる時だけは着てる。

外ではいつも黒の長袖Ｔシャツに黒のスカートにソックス。髪の色も合わせて全身真っ黒。違うのは赤色の目とほとんど露出してないやたらに白い肌ぐらい。

最後にぶかぶかでずり落ちてくる真っ白な帽子をかぶってミッシェンコンプリート。

「えーと…十秒。なかなかのタイム…。」

普段は十二、三だから結構なもの。「暗殺業界の約百ぐらいあるんじゃない？の鉄則」のその三十五。何事も迅速に終わらせるべし。着替えも例外ではない…はず。

外に出るとなぜかまだリンドウがいた。

「早いな…サクヤは普通に十分ぐらいかかるんだが。」

「まあ、人それぞれでしょ。なんでいるの？」

「言つてなかったか？俺も一緒に呼ばれてるんだ。」

「なるほど。」

でもなあ…あんまいい話じゃない気もするんだよなあ。

「榊のおっさん、久しぶりー。メデイカルチェック以来？」

「ちようどいい。今からアラガミ講座を始めようか。」

「いやだ。」

「やれやれ、まあいい、今は別の要件があるしね。リンドウ君もいるし。」

榊博士の部屋に行くと今までサボってたぶんの講座をしようとする

がもちろん拒否。相変わらず汚い部屋。汚いつていうか…煩雑？どつちもあまり変わらないかな？

「要件っていうのはちよつとアラガミの素材を集めてきてほしくてね。研究に使うんだ。やってくれるかな？」

「了解しました。」

あのリンドウが敬語を使つてる！？…いや当たり前か。これが普通。目上の人には敬語を。

「別にいいけど、なんで私？どこにでもいる新兵なんだけど。」

「なに、君の実力は決して低くないと思つてるよ。この前一人でシユウを倒せたそうじゃないか。」

私は使わないけどね。というか私は別に戦闘技術が優れてるわけじゃない。ただ生死の関わる場面で必要以上に緊張しないだけ。それだけで十分強い。新人の死亡原因の半分くらいが「恐怖で体が動かなくなるから」だから。それくらい精神面というのは重要。実際に模擬演習では平均ぐらいの戦績だし。

「…まあいいや。私もいいよ。それで何を集めればいい？」

あまり納得はしなかったものの断る理由はない。大した理由じゃないかもしれないし。

「ああ、それだけだね…。」

「労働基準法で訴えてやる…あのキツネ目…」
「っはははは、まああのおっさんは何食わぬ顔でとんでもないことを要求してくるからな。」

内容

アラガミエクス×10 猿神面×3 鳥神翼×5 騎士針（新人が狩れる相手なの？ボルグカムラン）×4……とあと十項目は続いている。なに、なんなの？そんなに私が授業サボってるのが気に食わないの？一人だったら絶対死んでる…

「ま、無事に終わったけどさ…。」
「そうだな、お疲れさん。よく頑張った！」
「あっ…。」

といてごく自然に頭を撫でられる。はふう…気持ちいいです…

………

………

………

…っは！

「い、意識がトリップしてたです…。」

「あー嫌だったか？悪い悪い。ちょうどいい位置に頭があるもんな。」

「い、いやそんなことはないです！」

「そうか。んでなんか口調変わってないか？」

「えーとー……そ、そんなことはないよ？」

「ぶっ！っははははは。疑問形で言われてもな！でも、なんかそっちのほうがお前にあつてゐる気がするぞ。」

「…あつそう。」

両手に大量の素材を抱えながらの会話。女子平均より少し身長が低めの私はもう前が見えない。あつタツミと衝突。ごめんねー。そういえば、今どうやって頭を撫でたんだろう？

そんなことを考えながらやっぱり思う。

お兄ちゃんに似てるな。と

ペイラーSIDE

マシロとリンドウが素材集めに苦戦している頃。

「さてと、まず、初めの一步だね。」

リンドウ君とマシロ君に頼んだ理由は二つ。
まずは普通に必要な素材があったから。

マシロ君の選抜理由は仲良くなっておこうという考え。最近のヨハネスと何らかの連絡を取っているところか見て何かをしているのは間違いない。何をしているかは全くつかめないが、仲良くなっておいて損はないだろうからね。気になる噂もあるし。

リンドウ君は…マシロ君一人じゃあの量は無理だろうしね。それ以外にもあることはあるけど…。

まあ今は関係ない。

「さて、どちらについてくれるのかな？黒猫君。」

第十八話ソーマって暗いよね。だよ（前書き）

支部長出てこないけど軽くキャラ崩壊してるかも…

第十八話 ソーマって暗いよね。だよ

「ソーマはどこにい……いた。」

ソーマを探しにロビーに来たら簡単に見つかった。いつものように一人で何かしてる……と思ったらサクがセットだった。

近づいてみるとサクがこっちに走り寄りいつもの定位置の肩の上に乗っかる。たまに頭だけど。それにっられてソーマもこっちに気づいた。

「やほ、ソーマ。」

「何の用だ……」

ちなみにソーママツちと呼ぶと見向きもしてくれないので廃止した。

「それにしてもサクと一緒になんて珍しいよね、猫好きなの？」

「別に……」

「あつそう。」

実は一番ないだろうなと思っていた組み合わせだったり。サクは基本人嫌い（一部例外）だし。あ、ソーマってやっぱり人じゃない？

「それで、何の用だ……話し相手が欲しいなら他を当たれ。」

「相変わらず、無愛想だよな。」

人と話すのただでさえ苦手なのに……え？そうは見えない？だったら私の演技力もなかなかのもの。

「ま、とりあえず、伝言。支部長がよんだよ。」

「っち……」

そういつとどこか腹正しそうに無言でどこかに消えてしまった。な
んで一介の新兵がこんな伝言をよこすのかという疑問を持つ余裕も
ないと見える。

「さて、サクはどうする？ 私はしばらくここにいるけど。」

「にゃっ！」

「…ずいぶんご機嫌だね…そんなにソーマが気に入った？」

私にはいまいちよくわからない。私個人の印象は無愛想、無口、根
暗、同族、中二病、その他ってな感じで嫌いでもないけど、気に入
る要素もない。

「ま、いつか…。」

私はその場で荒い歩調でソーマが戻ってくるのを待った。

「どういうことだ。」

「そんなこと言われても…。ねえ？」

「にやにやにやあ。」

食材…じゃなくて贖罪の町でのこと。見事なまでにソーマと二人きり。二人きりと書くとなんかこう甘い雰囲気っぽいけど現実はどうでもない。

「まじめに答えろ。」

「そういわれても…支部長にはなんていわれたの？」

「今日からクソ親父の味方のお前がいつしよに特務を受けるだ！」

「一つ訂正。私は支部長じゃなくて兄さんの味方。」

「協力してるんだから同じことだ！」

「違う。第一もともと私はあの人の事は嫌い。」

「…っち…もういい…行くぞ。」

「はいはい。」

先頭切ってソーマは高台から飛び降りて行ったのでそれをゆっくり追いかける。

任務内容はオウガテイルっぽいんだけどなんか変わったコア反応があるからそのコアをとってきてほしいという内容。特異点の情報は少ないから変わったコアをしらみつぶしにあたっているとみた。

「どんなアラガミなんだろうねー。」

「……………」

「ねえ、無視？」

「……………」

「…さびしくて死んじゃうよ？」

「……………」

「ねえ、サク。ほんとソーマのどこが気に入ったの？」

私の心が折れそうです。無視って地味につらい…しゃべらなければいいの？

結局目的のオウガテイルは無駄に体力が多いだけのパターンも何も変わらな雑魚だった…

…実はこの任務の裏にはソーマの父親として私に息子^{マシロ}の友達^{ソーマ}になってくれないかなあという親心からきていることを知るのは当分後の事。

第十八話ソーマって暗いよね。だよ（後書き）

マシロ「久々に再開したこのコーナー。そっぴやタイトルないなあ
ー」

ソーマ「なんで俺がこんなことをしなくちゃならねんだ…。」

マシロ「ソーマ、世の中には出たくても出れない人だっているんだ
よ？サクヤは一、二回しか出てないし。防衛班のみんなに至っては
もう…。」

ソーマ「俺には関係ない…。」

マシロ「そういうような気がしたよ…それじゃあコーナー終了。感想
待ってまーす。以上、存在理由のわからないコーナーでした。」

第十九話　まあ、あれだ、うん。だよ

珍しく第一部隊全員收拾。何の説明もされてない。そんなことより早く終わらないかなあ…と思っていると隣のコウタが話しかけてくる。サクも暇になったのか收拾のかけられていないカノンにお菓子をねだりに行った。いいなあ、猫になりたい。

「ねえ、何があんの？」

「さあ？なんだろうね」

もしかしたらルアの紹介かな？とは思っているけど。コウタは私から有益な情報を聞き出すことはできないと悟ると次はリンドウに同じ質問をする。

「リンドウさんは何か聞いてます？」

「新しく新人が来るんだとよ。」

「マジで！女の子だと…いや、相手にしてて疲れない奴だといいな…」

そうこつちを見ながらため息をつく。何？

「でも、ここも常に人手不足だし。増えてくれるのはうれしいわね。」

「たぶん、あいつだしなあ…」

「え？」

腕は確かだよ。うん。そこは認めてもいい。でも脳みそが…サクヤが何か口を開こうとすると前にツバキが目のまえにやってきた。

「ツバキさん。新しい人ってどんな人ですか？女の子？」

「…コウタ、なぜ知っている。」

コウタがいつものように先手を取ってハイテンションで聞くと。ツバキは微妙に睨む。

「えと、その…リンドウさんに教えてもらいました。」

これは…あれだ、蛇に睨まれたカエル。それを聞くと少し呆れ気味になりながらリンドウを見る。

「リンドウ、あまりぺらぺらしゃべるなど言っているだろう。」

「サーセン、姉上。」

リンドウは相変わらずふざけながら返し、ツバキはあきらめたようにため息をつく。

「…まあいい、ルア入れ。」

「アイアイサー。」

そういいながら入ってきたのは名前が違っただけで別人だったりせず。私のっているルア。

少し長めの銀髪にそれなりに整った顔立ち。身長もそれなりに高い。うん、外見だけ見ればなかなかポイント高いと思う。

「どうも、ルアです。適当による。」

「ルア、もうちょっとしゃっきとせんか。」

「サーセン（笑）」

ツバキ相手にここまでへらへらできる人間が何人いるか…。あれ、ツバキが少し肩を震わせてる…まあ、こんなやつめったにいないよなあ。

「…彼は旧イングランド地域出身だがここにおいてある神器に適合したためここに来た。実戦経験はまだ皆無だが模擬演習ではSSS+という最高成績をおさめている。」
「たまたまだろうけどなあ。」

ツバキが睨む↓それをものともせずにへらへら。

「おおー怖い怖い、綺麗な顔が台無…ってあーそうにらむなって…ま、そんなわけでよろしく、ああ、神器は旧型、スナイパーだ。」
「あ、なるほど、ピッタリだ。」
「ふっ、そうだろ。」
「あれ、二人とも知り合いなの？」

そんなふうに私が納得しているとコウタが混ざる。

「うん。昔馴染み。」
「ああ、一緒に風呂入ったこともあるぞ。」
「…ないから」
「まあ、照れるな照れるな。」
「照れてないっての。」

昔からあまり変わっていないやり取りをしながら横目でツバキを見る。あ、そろそろやばそう…キレる五秒前の顔。アイコンタクトでそれを伝えるとルアは納得したように引っ込み、どーぞ、心行くまで続を。と皮肉たっぷりツバキを促す。それもどうかと思う。

「いや、話は終わりだ。全員持ち場に戻るように。」

今回は逆に怖かったツバキは憤怒の表情をたたえながら、ツバキはそう言い残すとどこかに去って行った。大変だね。

「あ、そうそう…マシロちよつと話があるから来くれ。すぐわると思う。」

「はいよ…そんな訳だから、第一部隊の諸君。じゃあね。」

私たちもツバキの後を追うようにその場を後にした。

ルアに人気のないアナグラの廊下に連れて行かれ、いつもお世話になっているアイスが並ぶ自販機をたまたまみつけたので購入。おいしい。

「相変わらずアイス好きだな。太らねえの?」

「その分運動してるし。」

ゴッドイーター兼人殺し店だし。そういいながらルアはその自販機で「はずれっばいこれにしょ」と冷やしカレードリンクを購入。

「ふーん…うわ、やっぱはずれだこれ。」

「それで何の用事?くだらないことだったらアイス一本を要求する。」

「今喰ってるだろうが。」

「細かいことは気にしないの。」

そういうと、ふっと薄く笑い少しおかしそうにはなす。

「お前、少しは人らしくなった気がするよ、やっぱり。」

「でも、まだ欠陥品なんですよ。」

「それとこれとは別だしな。…今のお前なら少しぐらい素の自分を
出しても平気そうだ。」

それに対して私はふーんと適当に返す。この今の自分でもよくわからないキヤラ作りはルアにススメられたからだった。素の私は何でも異様で目立つという理由らしい。まあでも…。

「いいよ、もうこっちで慣れたし。」

「あつそう。んで聞きたいことってのはお前があの後何してたって
ことなんだが。」

「…兄さんの手伝い。そういうルアは？」

「フリーで働いてたさ。リンもいるし。」

「…それはまた弱くなつたねえ。」

「でも、こういうのもなかなかいいもんだ。」

リンちゃん、つまりルアにとって大切な人を作るというのはそれが
そのまま弱点になるということ。

リンちゃんを人質に取られたら？まあろくなことにはならないだろ
う。だからあまり、こっちの業界ではそういう人は作らない。友達
や恋人も作らず結婚なんて論外。肉親の前からたいていの奴らは姿
を消す。

「そついや、お前は世間一般で言う「極悪グループ黒猫の壊滅事件」
というネーミングセンスのかけらもない事件の後ほかの奴らはどこ
にいるか知ってるか？」

「死んだとは考えないんだね。」

「あいつらがあの程度で死ぬかったの。」

そりゃそうだ。

「私は知らないよ。というか見つけるのは骨が折れる。」

「お前でもか…」

だって、前にも言った気もするけど脳みそはともかく腕は化け物じみてるんだよ。

「ま、そんなのはどうでもいいでしょ。後は敵同士にならないといいね。あんたとは戦いたくないし。」

「同感だな。」

別にこいつを殺したくないとかそういうわけじゃなく単純に強いから。戦いたくない。それを最後にルアは全部飲みほした冷やしカレードリンクのアルミ缶をもう買わないようにしよ、とつぶやきながらゴミ箱に投げ入れその場を後にした。話は終わりという意味表示だろう。さてと…。ルアも気づいてただろうけど。

「盗み聞きはどうかと思うよ？リンドウ。」

そう物陰に隠れているリンドウに言い残し私もその場を去った。

第十九話 まあ、あれだ、うん。だよ（後書き）

マシロ「なにこのサブタイ。」

いや…思いつかなかったテヘ

マシロ「…あまりにもテヘ ってのが気持ち悪くてはきそうなんだけど…」

ぐはぁっ…もうちょっとオブラートに包んでほしかった…

マシロ「はいはい……そこで次回はちらりと出てきた黒猫について。お楽しみにー。」

感想、待ってマース。

第十九・五話 黒猫とは？だよ

「やれやれ、ばれてたか…。」

自室に戻りながら自嘲気味につぶやく。…これには前日に本部のほうから気になる情報がもたらされたことが原因だった。

極東支部に【黒猫】の生き残りがいるかもしれない。事実、スパイとして送り込んだ人間と次々に連絡が取れなくなっているらしい。正規の訓練を受けた手練ればかりだったのにもかかわらず…だ。

黒猫。それは昔本部の連中が壊滅に追い込んだ暗殺ギルド。

俺も最近知ったことだがこういうギルドというかそういうのはそれなりに多いらしい。だが熟度は大したことのな奴らばかりで本部が直轄で所有している部隊には到底かなわない。しかしその中で黒猫というのは本部直轄部隊でもかなわないトップレベルの実力者の集まりだった。

曰く金を払い誰かを殺すように依頼すれば三日以内に確実に行方不明になり。

曰くとある情報が欲しいといえは恐るべき精度で報告が来る。

曰くそいつらがその気になれば本部の重鎮を皆殺しにもできるだろうといわれる。

それを本部は恐れた。黒猫がその気になれば自分たちは殺される…そう思った本部は多額の金を払い他のギルドからもありったけの戦力を集め。襲撃。さすがの黒猫も数には抗いきれず壊滅した。…ということに表向きはなっていたが、不審な点が多い。

一つは死体は一つも見つからなかったらしいということ。

もう一つはなぜ事前に襲撃されることを察知できなかったのかということ。

そしてあの二人の口ぶりから見て黒猫の奴らはほとんどが生きているのだろう。

「にしても、あいつがねえ…。」

と、マシロの顔を思い浮かべる。

なんというかあいつは…なんかちょうどいい位置に頭があるんだよね。それで撫でてみるとものすごく幸せそうにするからそれを見ると楽しいというか…妹みたいな感じ？恋愛対象ではなくかわいがる存在みたいな。

あいつはまだ十五ぐらいのはず。その年でよくなれたものだ。にわかには信じがたい。まあ、そうだとしたらエリックが死んだときにさほどショックを受けていなかったことにも合点がいく。人の死ぐらい見慣れているのだろう。そこまで考え、ふと気づく。

…あいつは何でこのことを俺に教えたんだ？

いや教えたというか、盗み聞きを見逃してもらったという感じではあったが。教えてくれたことには変わりがない。うーん…

「わかんね…」

というか俺はもともとアラガミ相手に神器を振り回すのが本職であって頭を使う仕事は本職外なんだよ…

ったく…

「やれやれ…。」

めんどくせーなあ、おい。

マシロSIDE

「やっぱダメですか…。」

ぼーっとリンドウの通信履歴を不法に確認しながらため息をつきます。あのリンドウが盗み聞きしてたときになぜ見逃したか？

もしかしたら、このことを本部のお偉いさんに連絡するかもしれない。と思ったからです。一回連絡さえしてしまえば履歴がのこり、それを確認すれば相手の面が割れるというわけです。

…それに私が生き残りです。ってことを知られてもあまりデメリットはありません。あるっちゃありますが。

まあ今まで何も報告していないところを見ると、その可能性は低いなあとは思っていましたが。

「それにしても…なんで、リンドウを今まで殺らなかったんだろ…。」

ターミナルの電源を落とし「人殺しの私」から「仮面をかぶった私」に戻りつばやく。

本部とつながっている奴らを皆殺しにしろってのが依頼なのに。

…あれだよ。依頼者本人がリンドウを結構使ってるから。だから殺すことに抵抗があった。それだけの話…だよ。はあ…

「やれやれ…」

自分のことながらめんどくさいなあ…。

第二十話　なんかもうグダグダ…だよ（前書き）

タイトルの通りだが、後悔はしていない！！

第二十話 なんかもうグダグダ…だよ

今日はまた第一部隊に召集がかけられていた。理由は昨日支部長から私だけが呼び出され聞いた。新型の神器使いが第一部隊に所属されるらしい。それだけならいい。だけど…

それがリンドウを殺すための道具としてだったら。あなたはどうする？

とまあ、それはさておき。

「たぶん第二十二回私による料理教室ー」

「イエーイ。久しぶりだねー。」

リンちゃんに料理を教えていた。いや、なんか…行きたくなかったんだ…。

「今日はなぜか男心をつかみやすいらしい、肉じゃがをつくろうとおもいます。」

「頑張ります！！師匠！」

多少リンちゃんがおかしなテンションになってる気もするけど別にいいよね。

実はこう見えて家事全般は一通りできる。だからたまにこうやって料理を教えていた。

ちなみに家事が得意になった経緯は約五年前の黒猫に入ったばかりのころ。まだ「暗殺業界の約百はあるんじゃないかね？」の法則第五十五条、任務達成時直後が一番危険なり」を覚えていたとき。私の教育係だったお姉系のオカマである村上さん（四十代の中年）との会話が発端。

「マシロちゃんは休みの日は何してるのかしらん？」

「走りこみとか…この紙に書いてあること覚えたりです。」

「ふーん、えらいわねえ…他には？」

「？一日中それぐらいの事しかしてませんが。」

「…いやなんかこう他にもあるでしょう？読書とか。おしゃれとか。ルア君とデートとか。若い女の子なんだから。」

「いえ、とくには。」

「となるとなに？休みの日までずっと今みたいなつまらない修行をしているの？一日中ってことは休憩もなしで。」

「はい。」

その時、明らかに地声で男と解る声でこう怒鳴った。

「ばかもん！！そんなんでいいと思ってるのか！！」

「はい？ええと…」

「だめだお前は！何も分かっておらん！いいか。今から女の子のなんたるかを数時間は説教してやるから耳の穴かっぽじて正座しやがれ！」

と五時間にわたる説教の末に最後に週二回にわたる花嫁修業なる時間が加わることになったのだった。

ちなみにこれが役に立ったことはほとんどない。

「ま、そんな昔の話はどうでもいいか…それじゃあさっそく材料確認をしよう！」

「おおー！！」

そんなわけで料理教室が始まった。そんなわけでこれ以降たぶん私の出番はありません。

ルアSIDE

「（ブチブチ）あいつはもう後でいい…。」

ひまだなあー。マシロの奴こねえなあ…ツバキという名の火山があと少しで爆発しそうだ。暇だなあ…

……

……そういえば五年前ぐらいの黒猫健在のころ。自分の部屋の壁一面に猫のポスター。本棚は猫の写真集でいっぱいだったぐらい猫好きだった佐々木さんは元気だろうか…。

しかも猫耳と猫の尻尾をつけてた。昔風に言えば秋葉原とかにいそうだった…そのぐらい猫が好きしかった。大半からは距離をおかれてたが一部の奴らが熱狂的に支持してた…。猫耳…はあはあ…とか言ってる奴いたな…

とにかく猫好きだった。いつも猫がいかに素晴らしいかを説いて回っていた。その時の佐々木さんの目はとてもイキイキとして、とても魅力的に輝いていた。それが生きがいと満面の笑みで言っていたものだ。

しかし猫アレルギーだった。

神様はなんて残酷なのだろうか。なぜ大好きなものに近づくだけで鼻水をたらさなければならなかったのだろうか。なぜそんなささやかな幸せすら、かなえることができないのだろうか。

世の中は理不尽である。それを学んだ日。

「おい、ルア。」

「…はあ、なんでか…ん？あれ？」

過去の思い出に浸っていると（現実逃避ともいうな）隣のコウタが俺を思い出の世界から引き戻す。もう誰もいなく俺とコウタとおそらく新人であるう見知らぬ少女目の前にいた。

ふむ、セミロングとでもいうのだろうかそのぐらい長い銀髪。顔だちも整っているほうでかわいいっちゃん可愛いが…。

「残念ながら、俺のストライクゾーンからは外れてるな…」

俺はこう…胸が絶壁のような大きさが好きなんだよ！身長も小さいほうがいいんだよ！そうだよロリコンだよ悪いか！

…ごほん…取り乱した。すまん。幸い小さくつぶやいたのでこの子には聞かれなかったぽい。さて改めて…うん？

「なんつつか…ずいぶん見下されてる気がする。そんな目をしてる。」

「そうですね、ロリコンですしね。」

聞かれていた…だと。そういう考えに至った瞬間声に出してましたよとのツツコミが入った。

そういえば黒猫にもいたな…こんなやつ。

通称「真面目すぎなそんなんじゃ男がよってこねえよ？って言いたくなる学級委員タイプ」

面倒なんだよなあ。こういう人種。そんなことを考えているとアリスがまた見下された口調で。

「全く…ほんと自覚のたらない人たちですね。」

「コウタ、気をつけるよ。なに後輩に叱られてんだ。」

「お前だよ。」

「お二人のことです。」

「なんだと!？」

全くこの子は…

「お前も見ろ目がないなあ、俺とコウタはもう遺伝子レベルで天地の差があるんだぜ? あくなき常に人としての臨界点を超えようと日々努力をし。天才的な狙撃に、戦闘センス。これだけでもうコウタなんか目じゃないね。俺が人間だとしたらこいつはミジンコだぜ? あ、それはそれでミジンコに失礼か…。」

「なんかどさくさに紛れて罵倒されてなかったか?」

「はあ、もういいです…。」

呆れられてしまった。別にいいけどさー。

「ま、そんなわけですよ。」

「どんなわけですか…。」

どんなわけねえ……

「ええとー…親がアラガミに殺された者同士?」

「なっ…なぜそれを…。」

と耳元でささやいてやったら面白いぐらいに固まっていた。まずはペースをこっちに引き込む! …いや実はこういうプライドが高そうなのなタイプを見ると…なんかこっ…からかってみたくならないのか…。悪い癖だな…。

「なあなあ、二人でなにこそこそしてんだよー。」

「うん？愛の語らい。」

「んな！？…お前…こんな短時間でどうやって…」

「違いますから！」

「はっはっは照れるな照れるな。じゃあなー今夜は楽しみにしてるぞー。」

「お、お前ら、二人の仲はもうそんなところまで…。」

「だから違いますから！！！」

なかなか気分が良かった。久々に面白そうな奴だなあ…

あ…名前知らないじゃん。ということに気づき、アリサというのを知ったのは翌日の事。

第二十一話 雲っておいしそうっていつ子供いるけどあれ水でできてるんだか

タイトル最長記録!!

第二十一話 雲っておいしそうっていう子供いるけどあれ水でできてるんだから

「……………はあ。」

「お前もいい加減慣れろや。」

「あれは無理だと思う……………」

体育座りしながら膝を抱えてうつむ気ながらルアと雑談。もうヘリとかいやだ……………なんなのあれ……………なんというか高いのが嫌なんじゃなくて落ちそうで怖い……………。ぐらぐら揺れるし。

「ドラ。もん実在しないかな……………」

「無理だろ、二十二世紀もたぶんアラガミでいっぱいだ。」

ですよね……………夢のない世の中になったなあ……………今更のような気もすると現実逃避していると今しがた来たのであろう第三者から声がかかる。

「よくそんなんで今まで生きて来れましたね。情けない限りです。」

「あーこんにちは。アリサ。」

「よっ。とりあえずよろしく。」

ヘリで精神的に参っててアリサの到着に気づかなかった。いいかげんヘリにも慣れたいなあ……………というか別の移動手段考えてくれないかなあ……………どこでも。ア欲しいなあ……………あのアニメのガキ大将映画版だけはかつこいいいなあ……………もしかして狙ってる？ 普段とのギャップを見せつけることによって視聴者の心をつかもうって魂胆？

「そんな調子で、足を引つ張らないで下さいよ。」

「あいよ…あ、そうだ。アリサが私の分働いてよ。これなら足を引く張ることはない。」

「ふざけないでください。」

と、魅惑的なアイデアを提案してみるものの当たり前のように拒否された。そうしてるとルアがぼそりとつぶやく。

「なんつつか…シユンとかカレルあたりに嫌われそうな性格だよなあ。…顔はいいのに。」

「ああー、わかるかも…顔はいいのにね。」

「余計なお世話です。」

そんなふう楽しく？雑談していると、私がやっと落ち着いてきたところにリンドウも到着、相変わらずの重役出勤なり。

「お、今日は新型二人とお仕事か。足引つ張らないように気を付けるんで、よろしく頼むわ。」

いつもの場を温めるジョークに対してアリサは。

「旧型は、旧型なりの仕事をしていただければいいと思います。」

場を凍りつかせるジョークををかます。いや、これはもうジョークとは言えない気もする。ジョークとは相手の気持ちを和ますものであつて相手の顔を引きつらさせるものではない。

「ぶっ！…っははははははっはっはっは！」

ただどまあルアの心を和ますことには成功していた。
なんというか…KY？やっぱこの子とシユンあたりは絶対組ませな

いほうがいいと思う。

それを傍目に私はなるべく冷静さを保つ。なぜかって？そうしないと私も大笑いそうだからだよ。

「はは、まあ、期待に添えられるように頑張ってみるさ。」

と、苦笑しながらもあまり気にしていないような口調でアリサの肩に触れた瞬間。

きゃあ！

と、後ろに飛びのいて拒絶する。今のはもう考えて拒絶したとかいうレベルじゃない。条件反射に近い動き。それに対してリンドウは行き場をなくした手をひっこめながら苦笑する。

「あーあ、ずいぶんと嫌われたものだな。」

「だ、大丈夫です。問題ありませんから。」

残念ながらまだ、腹芸ができるほど人生経験はないらしく、目を不自然に見開き、肩を細かく震わせているところから大丈夫じゃないのは丸わかりだ。

「リンドウなんかやったの？」

「そんな、ジト目で見ろな。」

「あー、リン曰く年頃の女の子は複雑らしいですし。お父さんと一緒に下着洗ってほしくないとかいう年頃ですから。」

と、ようやく笑いをこらえられたのか、そんな軽口を叩くルア。なぜかお父さんという言葉に反応して余計大丈夫っぽくなくなった気がする。何でだろうね？

「あー、そうだな…よし、いいかアリサ。」

と、いつもと変わらない口調で一つの命令を下す。

「混乱しちまったときはな、空を見るんだ。そんで動物に似ている空でも探してみる。落ちつくぞ。それまでここを動くな。いいな。」

「な、なんで私がそんなこと…。」

「いいから、探せ。な？」

もう一度言い聞かせるとアリサがしぶしぶという感じでうなずく。それを確認したリンドウは私たち二人に向き直る。

「そんなわけだ、ルアはあとでアリサについてこい。マシロ行くぞ。」

「わかった。そんじゃあね、二人とも。」

「了解しましたー。あ、マシロ。どうせなら俺が来る前に終わらせといて。」

「いやだ。」

いつものようにそんな軽口をたたきながら少し高めの高台を飛び降りた。

ルア&アリサSIDE

「あーあれなんか、オウガテイルの顔に似てね？」

「そうですね。」

適当に流されてしまった。俺のガラスのハートが粉々だ。嘘だけど。

そのままぼーっと一緒に空を見上げてみる。いい天気だなあ……いいなあこんな時間。昼寝してえ……

「ルアさん。少しいいですか。」

「なんだー」

ああーあれはシュウの羽っぱいなあ……

「この前の事です……」

「なんだー」

おお！あれはボルグカムランじゃないか！？……なんでさっきからアラガミなんだろうな……

そんな疑問を持ちながらさらになんかに似てるっぽい雲を探しているとアリサがいつもの不機嫌そうな顔でこちらをにらんでいた。

「ちゃんと聞いてます？」

「この前の事だろ？俺はぼーっとしながらシリアスな話を聞ける男だからな。」

この前のことってなに？なんてことを思ったりするけどな。……

お、あれなんかヴァジュラのマントっぽい。……なんだよマントって何でマントだよ。

「……まあいいです。ところであなたはなんで私の親の事を知ってるんですか？」

「は？……ええとー。」

……

……

……
あつ！

「あ！あれか？…お前よくそんな雑談の内容覚えてたな。」

「茶化さないでください。」

「いや、本心なんだが。」

ンなもんいちいち覚えてられっか。

「まったく、そんな細かいことはつか気にしてるとモテねえぞ。さつさと動物に似た雲でも探してる。俺はもう四つ…あ、あれうさぎっぽい…五個も見つけたぞ。あ、いや、見つけないで俺をさばらせてくれると俺の好感度が上がるぞ…約二ポイント。」

「あげたくもないです。」

「あらら…リンドウに続き俺も撃沈つと…んじゃあ行くか。もう落ちついたろ？」

「そうですね…って、あ、待ってください！答えを聞いてません！」

ごまかしきれなかった…まあいい、だったら逃げるのみ。やたら長い銃身を持つスナイパー（ファルコン改だったかな）を肩に担ぎながらマシロやリンドウさんの後を追って飛び降りた。

第二十一話 雲っておいしそうっていつ子供いるけどあれ水でできてるんだか

長くなったので二つに分けます。

第二十二話 グリーンサラブレット。サラブレット？なんかおいしそう…だよ

「あいつの事なんだがな。どうもいろいろとわけありらしい。」

「へえー。」

と、適当に相槌を打つ。アリサの過去に何があったのかは大体オオグルマから聞いている。あ、オオグルマっていうのは支部長の協力者ってやつ。アリサ専属の医者だとか。

「ま、このご時世だ。みんないろんな悲劇を背負ってるちゃあ背負ってるんだが…。」

「家族がアラガミにむしゃりと食べられるとかはありふれてるよねー。他にも強姦で一生言えない傷を負うとか。自殺とか。毎日食べるものがない子供とか。」

本部の非人道的な実験で実験体が精神崩壊。実験に失敗してアラガミ化した子供。身近には催眠術をかけられている殺人兵器もいたなあ。いろいろと夢のない世の中になったものだ。…まあ実験体の調達…要するに子供の誘拐は何度かやったことがあるけども。

「夢のない世の中だね。」

「そうだな…ま、同じ新型のよしみだ。仲良くしてやってくれ。」

「善処はするよ。…でもまあ。」

「どうした？」

「いや…何でもないよ。」

ま、いいや。それにしてもアリサにねえ…適当にお菓子作ってみる？手軽なので行くとクッキーとか？いや、アリサってクッキー嫌いだったりするかな？甘いものが嫌いっていう人はいるけど…いや、

昔だれかが女の子は甘いものが遺伝子レベルで好きとか言ってた気も…でも太るからそこは食べすぎないようにとか…難しいな…こういうこと今まで考えたことなかったしなあ。と悩んでいることにリンドウが気づいたのか笑いながらこういつてくれる。

「ははっ、そんな難しく考えるなっで。適当にやるぐらいがちょうどいいんだよ。」

「そういうものかな？」

「悩み過ぎは良くないぞ。」

「そっか…それじゃあ…」

適当に作ってみよう。そう考えながら楽しみだなと思う。そして今自分が胸中でつぶやいた言葉にハツとする。

今私「楽しみ」っていった？いつもみたいに口先だけじゃなくて本心から。そしてなぜか…

いつの間にか顔が笑顔になっていた。

いつもの薄っぺらい作り笑いなどではなく。

「お、噂をすればだな。」

とリンドウと一緒に後ろを見てみればそこにはいつもの仏頂面のアリサとルアが立っていた。

ルアSIDE

今回の目的は贖罪の町でシュウを二体。まあ、そんなに難しい任務でもないだろう。名前はグリーンサラブレット。相変わらず訳が分からない。誰考えてるんだろ。

「ふう…。」

と、そんなどうでもいいことは置いておき、深呼吸をして銃のスコップを覗く、狙いはシュウの頭に定める。

戦闘はすでに始まっており、マシロとリンドウが切りかかり、アリサは俺よりは中距離で連続で弾丸を乱射し、弾が切れたら切りかかるを繰り返していた。しかし同じ新型のマシロはほとんど銃を使っていない。宝の持ち腐れ。

俺はといえばかなり離れた距離でじつと時を待つ。それは相手の動きを見極め確実に当てるため。ひたすら待つ。

それにしてもやはりリンドウさんは新人二人とは動きが違った。スキができれば切り付け、シュウの反撃が来ればすでにそこにリンドウさんはいない。やはり何度も戦ったことのある相手だとやりやすいのだろう。やはり経験というのは大事だ。しかしマシロは思っているというのだが、アリサもなかなか動きがいい。新型故なのか実力か…口だけってわけではなさそうだ。

「さて、俺もやるか…。」

五分ぐらいそうしていて、いつまでも観察しているわけにもいかないので引き金に指を置く。そして…。

パン！

青色をしたレーザーは狙いたがわずシュウの頭部に命中。そしてそのまま休むことなく連続で引き金を引く。

パン！！

パン！！

滑空攻撃をしようが、大きくバックステップしようが関係なくすべて頭部に銃撃が吸い込まれていく。わずかな筋肉の動きを読み、どのくらいのスピードで動くか？それらをすべて先読みし一定のリズムで撃つ。

二十回ぐらい引き金を引いたあたりでいつの間にかオラクル細胞（弾丸）が切れていたにもかかわらず引き金を引いていたことに気づき、ゆっくりと引き金から指をはなす。…思わず集中しすぎたようだ、というかなり集中しないとこれはきつい。まあ、全部弱点の頭部にたたきこんだんだ。もうすぐ終わるだろう。

そして、予想どおりオラクル細胞が再補充される前にアリサが胴体にオラクル製の弾丸を叩きこみ、シュウの全身から力が抜け、倒れたのが見えた。

マシロSIDE

「すげえな…。」

「言ったとおりだったでしょ。」

と、遠くのかなり小さく見えるルアを見ながら。リンドウはつぶやいていた。…実際リンドウは戦闘が始まってからじっと動かないルアを見て何度かルアのもとに行こうとはしていたのだ。それを私が

とめていたんだけどね。

あいつはロリコンの変態ではあるが、その動体視力というかそういうものにはものすごい恵まれている。というか狙撃に必要な要素の冷静さとか、慌てずにじつとチャンスを待つ精神とか狙撃に関する才能は天下一品だったりする。

実際、一度打ち始めてからはすごかった、ピタッと狙いをつけうち、打った瞬間にまたものすごい速さで銃身が動き、ピタッと止まり打つ。それが全部、小さい頭部に命中している。とても私には出来ない。でもまあ、サクヤとかジーナには、狙撃だけで言ったら上かもしれないが、ゴッドイーターに関しての実力は遠く及ばないだろう。なぜなら…とそちらを向くと…。

ルアが最初からもう一体いたシュウに吹き飛ばされているのが見えた。…たぶん見えてなかっただろうね…注意力というか周りが一切見えていない。たぶんルアの目にはシュウ一体しか見えていなかったのだろう。

強いんだか、弱いんだか…。

まあ、それでもルアはぴんぴんしていたが。その後は難なくもう一体も殺し、帰ることとなった。

蒼穹の月・前夜だよ（前書き）

今回は短めになります。今回もか？

蒼穹の月・前夜だよ

「あー今日もここはいい天気だねえ。」

ぼーっとあるものを探しながらふと空を見上げる。平和だなあ…。

「全く、どこにあるんだか…あ、あれかな…。」

と、遠くの赤い物体が日光を反射しているのを見つける。近づいてみるとその隣に茶色い武器のようなものもあった。ラッキー。その茶色い武器…見知らぬ神器使いの神器を握り回収。わずかに神器が私を浸食しようとし始めるがそれを防ぐ専用のグローブを持っていたので浸食はされない。

「さて、アラガミ化した神器使いの腕輪と神器。回収終了つと、元人間アラガミも始末したし…」

帰ろつと。

「…アラガミ化した神器使いの始末。及び腕輪、神器の回収ともに完了しました。イレギュラーは特になし。報告は以上です。」

我ながら全く感情のこもっていない声で支部長に報告します。後ろに煙草をくわえた中年男性もいますが誰でしょう？必要なら勝手に話し始めるでしょうから聞きはしませんが。

「うむ、ご苦労だった。もとは仲間だった人間を殺すのはつらかっただろうがよく頑張ってくれた。」

解ってて行ってるんでしょね…全く辛くありません。というかそれを見越していつもはリンドウさんに頼んでいるところを私に頼んだでしょう。人殺しには慣れてますしね。この人嫌いですしさつさと帰るとしましょう。

…そういえば本気で嫌いっていう感情を最後に持ったのはいつでしたっけ。

「お気遣い感謝します。それではこれで。」

「いや、そのまえに君に話しておかねばならぬことがある。まずは彼を紹介したい。」

と、後ろで今までのやり取りを黙って聞いていた中年男性が前にやってくる。

「私は、オオグルマダイゴという。それにしてもまさか黒猫に生き残りがいるとはね。よろしく頼むよ。」

握手を求めてきましたがそれに対して会釈で返し無言で握手を拒否します。そうするとオオグルマさんは苦笑しながら手をひっこめました。

「彼がなにか？」

「近々、リンドウ君がアーク計画にかんづき始めている。まだ特異点が見つかっていない以上。まだ本部に知られるわけにはいかないのだよ。」

「要するに暗殺しろと…それと彼にどんな関係が？」

そうして、支部長はその計画とやらを話し始めた。

決行する日は追って伝える。そういわれたのが一週間前。

そんなとある夜に、端末がメールを受信したことを持ち主に伝える。
内容は簡潔。

「明日、決行する。計画に変更はなし。」

無言でそれを閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6649p/>

人を形作る大切なかけら

2011年7月10日00時24分発行